

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

北 裏 畑 遺 跡

雷 遺 跡 b 地 点

浅 間 内 遺 跡

上谷津台南遺跡 d 地点

高津新田野馬堀遺跡 i 地点

麦 丸 遺 跡 d 地 点

村上宮内遺跡 b 地点

村上新山西遺跡

向山遺跡 b 地点

白 筋 遺 跡

新林遺跡 d 地点

下高野新山遺跡

平成13年度

八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成12年度市内遺跡発掘調査事業として、国及び県の補助金を受けて実施した発掘調査の報告書である。
2. 調査遺跡名及び所在地、期間、面積、調査原因は下記のとおりである。

No.	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	面 積	調 査 原 因
1	北裏畑遺跡	萱田町字萱田町824-2 他	12.4.20～ 12.4.28	115m ² ／710m ²	共同住宅建設
2	雷遺跡 b 地点	米本2476他	12.4.24～ 12.5.11	454m ² ／3,648.77m ²	病院増設
3	浅間内遺跡	村上字浅間内2807-1 他	12.5.30～ 12.6.21	上層94m ² ／1,054m ² 下層5m ² /98m ² 本調査 98m ²	土地区画整理
4	上谷津台南遺跡 d 地点	上高野字上谷津台1049-1 他	12.6.21～ 12.7.5	224m ² ／1,527m ²	盛土工事
5	高津新田野馬堀遺跡 i 地点	八千代台西 9 丁目45-1 他	12.8.22～ 12.9.12	36m ² ／208m ²	宅地造成
6	麦丸遺跡 d 地点	麦丸字高野堀込1180-1	12.9.29～ 12.10.10	75m ² ／700m ²	資材置場
7	村上宮内遺跡 b 地点	村上字宮山835-1 他	12.10.26～ 12.10.31	256m ² ／2,043m ²	宅地分譲
8	村上新山西遺跡	村上字新山649-3	12.12.25～ 12.12.28	205m ² ／1,400m ²	残土埋め立て
9	向山遺跡 b 地点	大和田新田字向山476-16	12.12.15～ 12.12.25	上層332.8m ² 下層 9.6m ² ／2,983.06m ²	共同住宅
10	白筋遺跡	村上字白筋2700-1 他	13.1.18～ 13.1.25	94m ² ／210m ² 本調査 1m ²	土地区画整理
11	新林遺跡 d 地点	上高野字新林1195-2, 3, 4	13.2.15～ 13.2.28	530m ² ／5,300m ²	土地区画整理
12	下高野新山遺跡	下高野字新山546 他	13.3.19～ 13.3.26	146m ² ／1,530m ²	病院増設

3. 整理作業は、平成12年度事業として平成12年 6 月 1 日から平成13年3月31日までの期間に行い、報告書印刷は平成13年度事業として平成13年 9 月 25 日から平成14年 3 月 29 日までの期間に行った。
4. 本書の執筆は、宮澤久史が I・II-1, 4 を、森竜哉が II-2, 6, 7, 9, 12 を、常松成人が II-3, 8, 10, 11 を、秋山利光が II-5 を行った。
5. 報告書抄録及び調査組織は、写真図版の前に掲載した。
6. 土層説明の色調の表記法については、一部、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帖」(13版1993.1)を用いている。
7. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査時、報告書作成時において下記の方々にご指導いただいた。記して感謝する次第である。
栗本佳弘 鳴田浩司 峰村 篤 山下亮介 山本禮典 横田正美 (敬称略)

本文目次

I	調査に至る経緯	1
II	各遺跡の概要	3
	1. 北裏畑遺跡	3
	2. 雷遺跡 b 地点	5
	3. 浅間内遺跡	7
	4. 上谷津台南遺跡 d 地点	13
	5. 高津新田野馬堀遺跡 i 地点	16
	6. 麦丸遺跡 d 地点	19
	7. 村上宮内遺跡 b 地点	22
	8. 村上新山西遺跡	25
	9. 向山遺跡 b 地点	27
	10. 白筋遺跡	29
	11. 新林遺跡 d 地点	33
	12. 下高野新山遺跡(第 4 次確認調査)	36

挿図目次

第 1 図	市内遺跡位置図	#	図	14	
第 2 図	北裏畑遺跡位置図	3	第 20 図	上谷津台南遺跡 d 地点土層断面図	14
第 3 図	北裏畑遺跡トレンチ配置図	4	第 21 図	上谷津台南遺跡 d 地点 01 P 遺構実測図	14
第 4 図	北裏畑遺跡土層断面図	4	第 22 図	上谷津台南遺跡 d 地点 02 P 遺構実測図	14
第 5 図	北裏畑遺跡出土遺物	4	第 23 図	高津新田野馬堀遺跡 i 地点位置図	16
第 6 図	雷遺跡 b 地点位置図	5	第 24 図	高津新田野馬堀遺跡 i 地点遺構検出状況図	17
第 7 図	雷遺跡 b 地点遺構検出状況図	6	第 25 図	高津新田野馬堀遺跡 i 地点 H トレンチ土層断面図	17
第 8 図	雷遺跡 b 地点道路状遺構実測図	6	第 26 図	高津新田野馬堀遺跡 i 地点 J トレンチ土層断面図	17
第 9 図	浅間内遺跡位置図	7	第 27 図	高津新田野馬堀遺跡 i 地点 A トレンチ土層断面図	18
第 10 図	浅間内遺跡(第 5 次)トレンチ配置図	9	第 28 図	高津新田野馬堀遺跡 i 地点出土遺物	18
第 11 図	浅間内遺跡(第 4 次)遺構検出状況図	9	第 29 図	麦丸遺跡 d 地点位置図	19
第 12 図	浅間内遺跡 73D 遺構実測図	9	第 30 図	麦丸遺跡 d 地点遺構検出状況図	20
第 13 図	浅間内遺跡 73D カマド実測図	9	第 31 図	麦丸遺跡 d 地点 01 P 遺構実測図	20
第 14 図	浅間内遺跡出土遺物	10	第 32 図	麦丸遺跡 d 地点 01M 遺構実測図	20
第 15 図	浅間内遺跡ピット実測図(1)	10			
第 16 図	浅間内遺跡ピット実測図(2)	11			
第 17 図	浅間内遺跡ピット実測図(3)	12			
第 1 表	浅間内遺跡ピット一覧	12			
第 18 図	上谷津台南遺跡 d 地点位置図	13			
第 19 図	上谷津台南遺跡 d 地点遺構検出状況				

第33図	麦丸遺跡 d 地点出土遺物……………21	第47図	白筋遺跡位置図……………29
第34図	村上宮内遺跡 b 地点位置図……………22	第48図	白筋遺跡(第3次)遺構検出状況図……………31
第35図	村上宮内遺跡 b 地点遺構検出状況図……………23	第49図	白筋遺跡出土遺物……………31
第36図	村上宮内遺跡 b 地点出土遺物(1)……………23	第50図	白筋遺跡 2 P 遺構実測図……………31
第37図	村上宮内遺跡 b 地点出土遺物(2)……………24	第51図	白筋遺跡 1, 2, 3 トレンチ遺構検出状況図……………32
第38図	村上新山西遺跡位置図……………25	第52図	白筋遺跡 2 トレンチ土層断面図……………32
第39図	村上新山西遺跡遺構検出状況図……………26	第53図	白筋遺跡 1 トレンチ土層断面図……………32
第40図	村上新山西遺跡 3 トレンチ土層断面図……………26	第54図	新林遺跡 d 地点位置図……………33
第41図	村上新山西遺跡 6 トレンチ土層断面図……………26	第55図	新林遺跡 d 地点遺構検出状況図……………34
第42図	向山遺跡 b 地点位置図……………27	第56図	新林遺跡 d 地点土層断面図……………35
第43図	向山遺跡 b 地点遺構検出状況図……………28	第57図	新林遺跡 d 地点出土遺物……………35
第44図	向山遺跡 b 地点 01 P 遺構実測図……………28	第58図	下高野新山遺跡位置図……………36
第45図	向山遺跡 b 地点土層断面図……………28	第59図	下高野新山遺跡遺構検出状況図……………37
第46図	向山遺跡 b 地点出土遺物……………28	第60図	下高野新山遺跡出土遺物……………37
		第61図	下高野新山遺跡土層断面図……………37

図 版 目 次

図版 1	北裏畑遺跡・雷遺跡 b 地点
図版 2	浅間内遺跡 1
図版 3	浅間内遺跡 2・上谷津台南遺跡 d 地点 1
図版 4	上谷津台南遺跡 d 地点 2・高津新田野馬堀遺跡 i 地点
図版 5	麦丸遺跡 d 地点・村上宮内遺跡 b 地点 1
図版 6	村上宮内遺跡 b 地点 2・村上新山西遺跡
図版 7	向山遺跡 b 地点・白筋遺跡 1
図版 8	白筋遺跡 2・下高野新山遺跡
図版 9	新林遺跡



第1図 市内遺跡位置図 (1:50,000)

I 調査に至る経緯

八千代市は首都圏のベッドタウンとして宅地開発が進んだ地域であり、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、この性格を強めている。そうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）では千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）の指導のもと、開発事業者からの「埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての照会」（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち確認調査が必要と判断される遺跡については、国庫と県費の補助を受け発掘調査を実施している。

北裏畑遺跡 平成12年3月、島田亘氏から共同住宅建設のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を実施したところ、現況は荒蕪地で遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、周知の遺跡の範囲内であり、隣接の畑で遺物が散布していることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、速やかに文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され、準備の整った4月20日に調査を開始した。

雷遺跡（b地点） 平成12年3月、医療法人社団踏青会下総病院から病院増築のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を実施したところ、現況は山林および荒蕪地で、遺物はわずかに一点採集できるに過ぎなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の確認調査及び本調査の実績から遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、速やかに土木工事の届が提出され、準備の整った4月23日に調査を開始した。

浅間内遺跡 本遺跡は、辺田前土地区画整理事業地内に所在する遺跡で、本事業については、平成2年5月に八千代市辺田前土地区画整理組合（当時は設立準備委員会）から照会が提出され、平成3年4月に県教委によって、事業区域、596,000㎡のうち98,000㎡について遺跡有り回答が出されている。本遺跡については平成6年から7年度に調査を実施したが、一部に未調査区域が残っていた。今回、一部に残っていた未調査区域と、平成11年度に実施した確認調査の結果を踏まえての本調査対象区域について事業者と協議を行い、協議の結果、4月に土木工事の届が提出され、準備の整った5月27日に調査を開始した。

上谷津台南遺跡（d地点） 平成12年5月、株式会社青木建設から盛土造成のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は山林で遺物散布状況を観察できる地点はなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の確認調査及び本調査の実績から、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、事業者から速やかに「土木工事の届」が提出され、伐採等、準備の整った6月21日に調査を開始した。

高津新田野馬堀遺跡（i地点） 平成12年6月、株式会社東栄住宅から宅地造成のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は畑及び駐車場で、遺物散布状況を観察できる地点はなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、現状で野馬堀の一部を確認することができた。このため照会地内の野馬堀に沿った部分にかけての208㎡を遺跡有りとし確認本調査が必要と判断した。事業者はその旨を回答し、協議をした。その結果、7月に事業者から「土木工事の届」が提出され、下草刈り等の準備が整った8月22日に調査を開始した。

麦丸遺跡（d地点） 平成12年7月、周郷理則氏から資材置場建設のため照会が提出された。これを受

け市教委で現地踏査を実施したところ、現況は山林で遺物散布状況を観察できる地点はなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、周辺の畑では遺物が散布しており、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため急傾斜地を除く台地平坦面について確認調査が必要と判断し、その旨事業者に回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、9月に「土木工事の届」が提出され、伐採等の準備の整った9月29日に調査を開始した。

村上宮内遺跡(b地点) 平成12年6月、有限会社中央土地建物から宅地造成のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は荒蕪地で遺物散布状況を観察できる地点はなかったが、周辺の畑等で遺物散布を確認することができた。周知の遺跡の範囲内であることから、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨事業者に回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、10月に「土木工事の届」が提出され、準備が整った10月23日に調査を開始した。

向山遺跡(b地点) 平成12年10月、株式会社田中建設から共同住宅建設のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は山林で遺物を観察できる地点はなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の発掘調査の実績から遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果11月に「土木工事の届」が提出され、伐採等の準備の整った12月15日に調査を開始した。

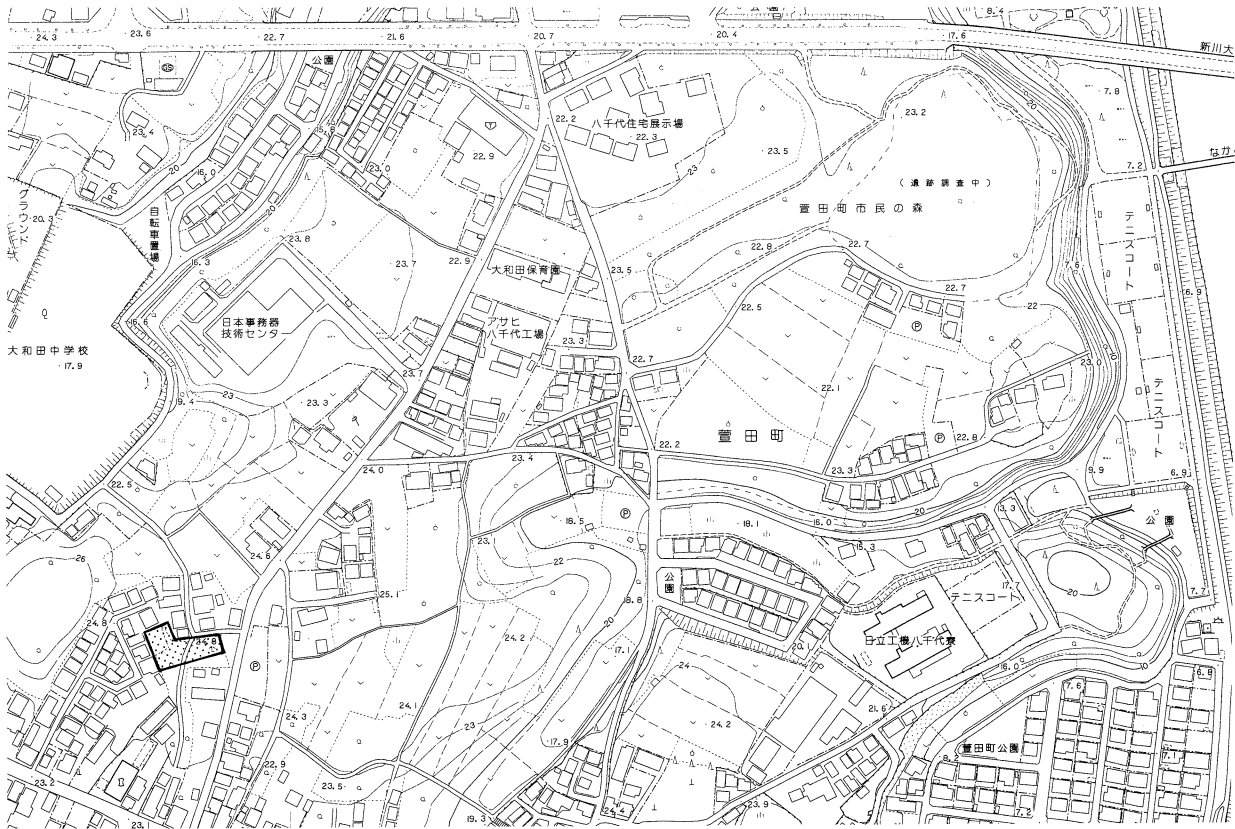
村上新山西遺跡 平成12年9月、有限会社立建商事から建築残土による盛土工事のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は山林で、遺物散布状況を観察できる地点はなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、過去、近隣において発掘調査が行われた実績もあり、その他にも遺構が検出される可能性があると考えられた。このため急傾斜地を除く台地平坦面～縁辺部について確認調査が必要と判断し、その旨、回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、11月に「土木工事の届」が提出され、伐採等の準備が整った12月25日に調査を開始した。

白筋遺跡 本遺跡は、浅間内遺跡同様、辺田前土地地区画整理事業地内に所在する遺跡で、市指定文化財である根上神社古墳を含む事などから、事業者とは断続的にその取り扱いを協議してきたところである。今回、区画整理事業の一貫として造成及び擁壁工事が計画されたため、協議が再開された。協議の結果、工事区域と遺跡区域が重なる部分210㎡について調査が必要となった。12月に「土木工事の届」が提出され、伐採等の準備の整った1月18日に調査を開始した。

新林遺跡(d地点) 平成12年3月、八千代市上高野第一土地地区画整理組合設立準備委員会から区画整理事業のため、照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は山林及び畑で、縄文土器を中心に比較的多くの遺物が散布していた。周知の遺跡の範囲内であり、過去、隣接区において発掘調査が行われた実績もあり、その他にも遺構が検出される可能性があるとして判断し、照会地52,000㎡に対して、新林遺跡21,800㎡、黒沢池上遺跡4,600㎡の有り回答をした。この回答に沿って事業者と協議し、新林遺跡については、5,400㎡を国庫補助対象事業とし、確認調査を行うこととなった。この結果、平成12年10月に「土木工事の届」が提出され、準備が整った平成13年2月15日に調査を開始した。

下高野新山遺跡 平成13年2月、医療法人心和会から病院増築工事のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は山林で、遺物散布状況を観察できる地点はなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、過去隣接区域において発掘調査が行われた実績もあり、その他にも遺構が検出される可能性があるとして判断した。照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨事業者に回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、3月に「土木工事の届」が提出され、準備が整った3月19日に調査を開始した。

II 各遺跡の概要



第2図 北裏畑遺跡位置図 (S=1:5,000)

1. 北裏畑遺跡

遺跡の立地と概要

北裏畑遺跡は、市域の中央部、新川の西岸の台地上平坦面に位置する。標高は約24mで、国道296号線(成田街道)から北方約100mの住宅地の中に所在する。現況は、住宅地に一面残されていた荒蕪地であった。遺跡の西方には弥生時代を中心とする上ノ山遺跡、北方の小支谷を隔てた台地には旧石器時代から平安時代にわたる複合遺跡である川崎山遺跡等が展開する。

北裏畑遺跡の過去の調査例は無く、今回が初めての調査である。

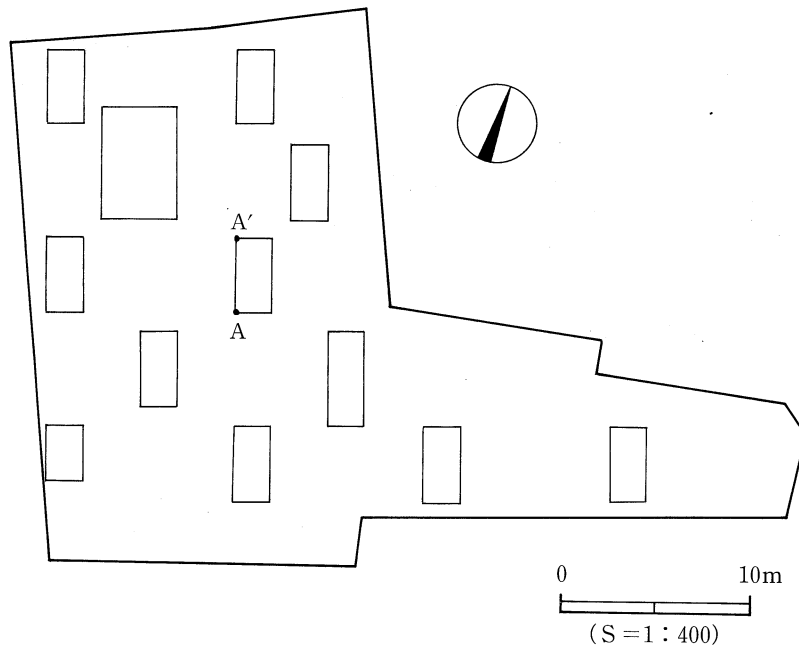
調査の方法と経過

調査は調査区の形状にあわせ5m×5mのグリッドを設定した。その区画をもとに2m×4mのトレンチを10m間隔で配置し、必要に応じて拡張等を行った。

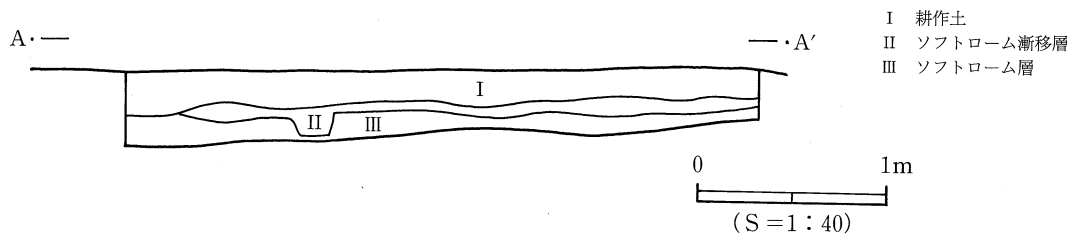
調査期間は、平成12年4月20日～同年4月28日である。4月20日に機材搬入等環境整備を行い、21日にトレンチ設定を終了し、人力による包含層調査を開始した。26日には重機による表土除去作業ならびに遺構検出作業を実施し、27日～28日に写真撮影等の記録作業を行った。28日に機材撤収およびトレンチの埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査の概要

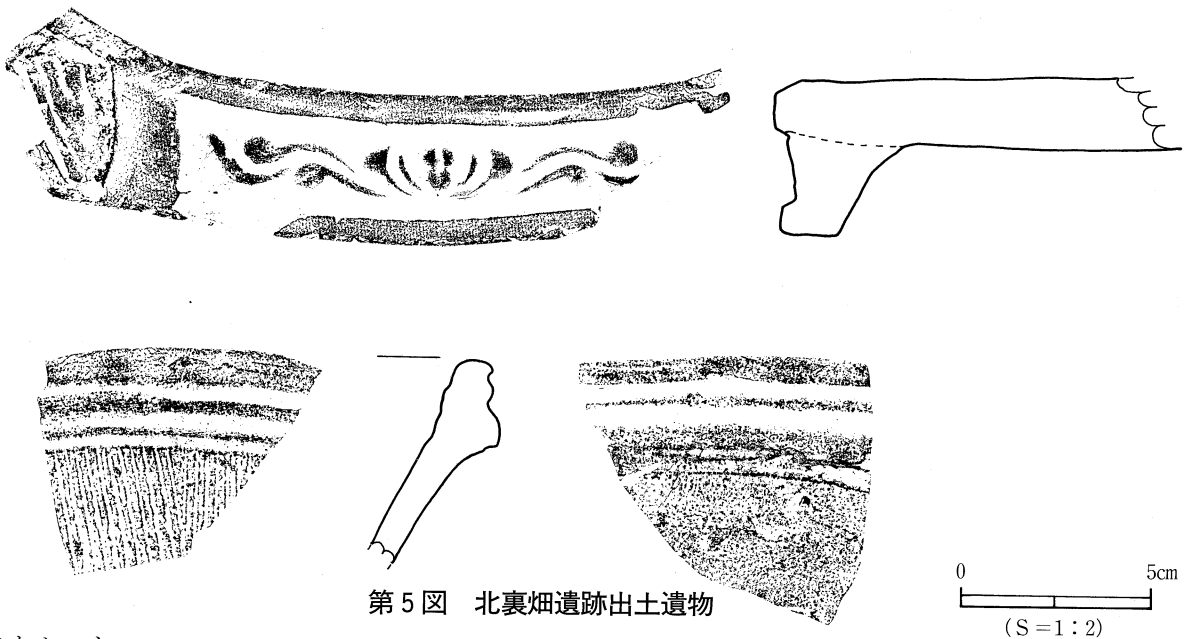
本遺跡の基本層序は、I表土、IIソフトローム漸移層で、新期テフラ層等、その他の層は検出できなかった。遺構確認作業はII層上面で行った。その結果として、遺物包含層及び遺構を検出することは



第3図 北裏畑遺跡トレンチ配置図



第4図 北裏畑遺跡土層断面図



第5図 北裏畑遺跡出土遺物

きなかった。

遺物については、近世から近代にかけての陶磁器，軒先瓦が少量出土した。

調査のまとめ

今回の調査では、出土遺物から近世から近代の遺跡の所在が確認できたわけであるが、具体的な遺構を検出するには至らなかった。江戸時代後期盛んになった成田詣りに利用された成田街道の大和田宿近隣に位置する本遺跡から、該期の遺物が出土したのもそれらのことと無関係ではないだろう。いずれにしても今後も資料の蓄積を行い、考察していきたい。

2. 雷遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

雷遺跡は市域北部を東流する新川に至る谷津の最奥部で、標高約23～24mの台地上平坦部に位置する。南側近接地において平成5年に確認調査が実施されている。その結果、平安時代を主体とする竪穴住居跡が24軒検出された。今回調査区の南側隣接地において、縄文時代中期加曽利E式、弥生時代後期、平安時代土師器等の土器片を採集している。

調査の方法と経過

調査は伐採終了後、調査区の形状に沿って10m間隔に2×5mのトレンチを設定し、適宜その間にトレンチを設け遺構確認を行った。また一部において拡張して遺構の性格を把握することに努めた。

調査期間は平成12年4月24日～5月11日で、4月24日～26日トレンチ設定及び包含層把握のための手掘り、27.28日重機によるトレンチ掘り下げ、5月1日～8日各トレンチ清掃、8日～11日12トレンチ及び拡張部分の道路状遺構調査と実測により調査を終了した。並行して重機による埋め戻しを行った。

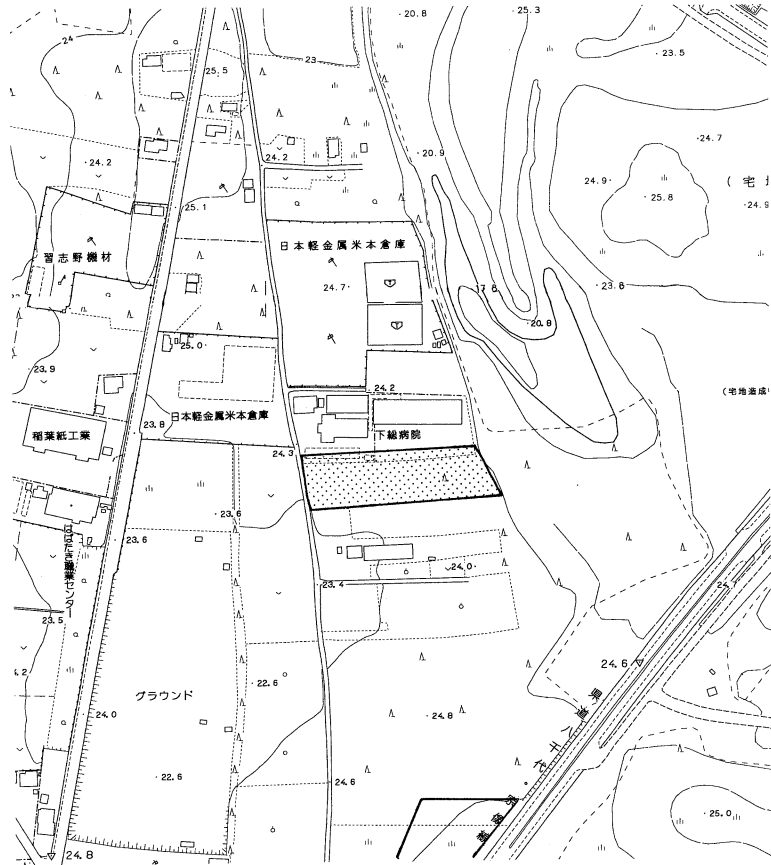
調査の概要

本遺跡の基本層序は、I表土、II黒色土、III暗褐色土、IVソフトロームとなっている。

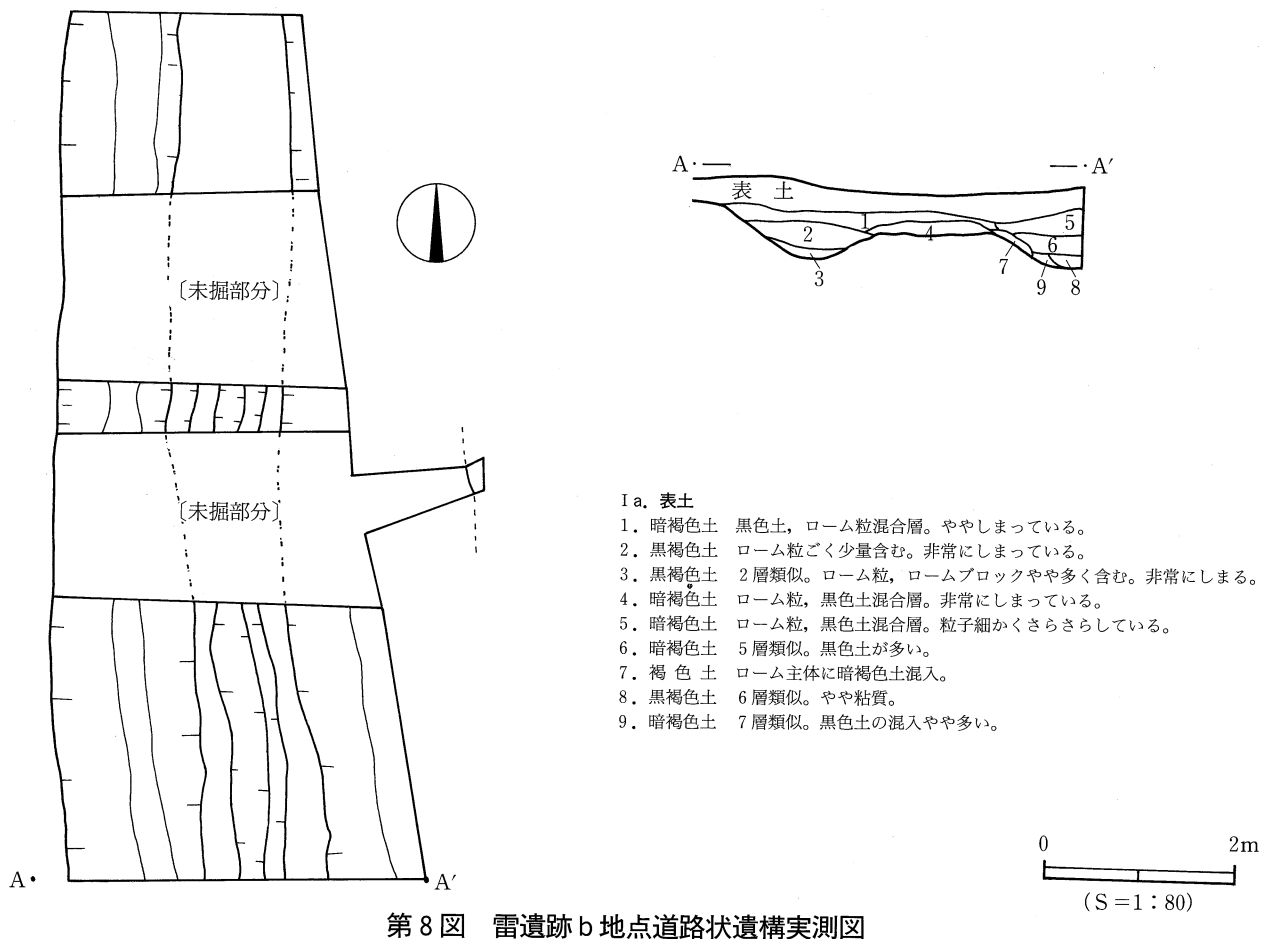
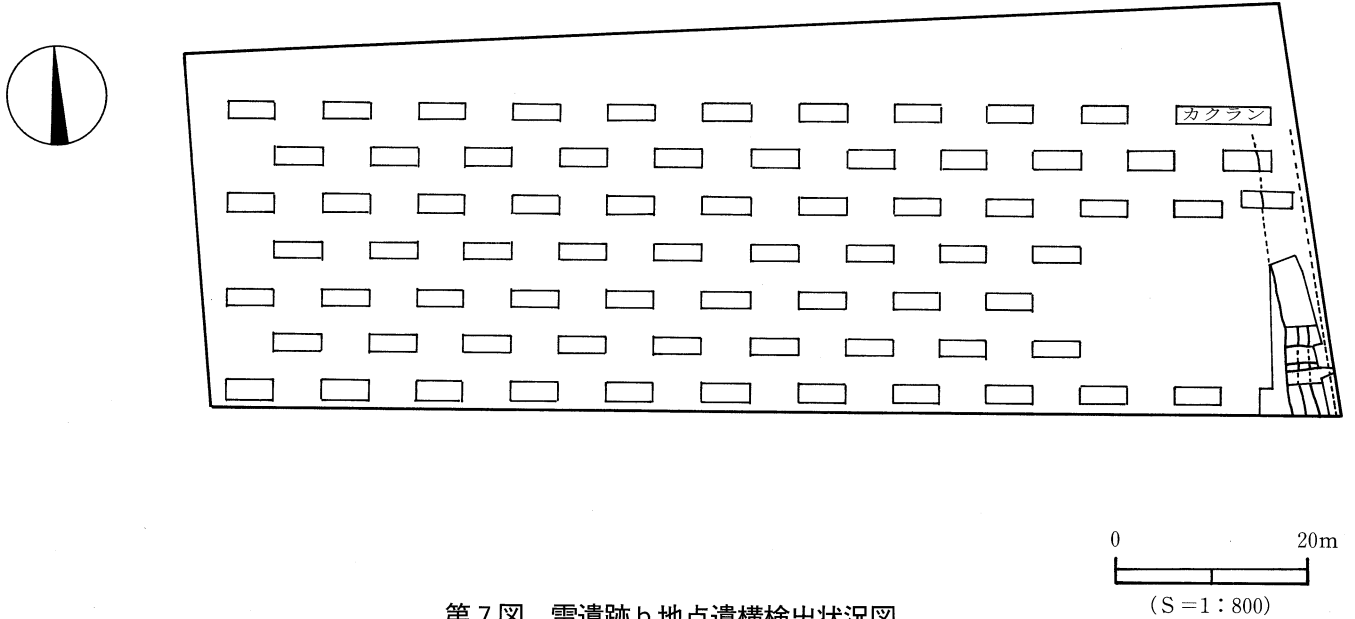
調査の結果、時期不明の道路状遺構1条を検出した。形状は中央の平坦な部分と両サイドに溝を有する。全体幅約4.3m、平坦面の幅1.2～1.3m、溝幅1.5m、深さ0.5mである。平坦面は踏み締められていて硬化している。溝と平坦面の土層観察から当初平坦面を道路として使用していたが、溝が埋まった時点で西側溝のみを道路として拡張して使用している。遺構からの遺物の出土はなく時期は不明である。また、良好な土層堆積を示していたにも係わらず、縄文時代等の遺物の出土はなかった。

調査のまとめ

雷遺跡の南側地区において展開した縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代前期の各遺構は、今回の調査区では皆無であった。南側の谷頭に遺構が集中している状況が想定される。時代は下って、時期不明の道路状遺構は明治15年の迅速図には痕跡さえも伺えない。それ以前の道路として考えられる。性格については、米本と神野・保品の字を分かち境界上に位置していることから字境の指標として考慮したい。



第6図 雷遺跡 b 地点位置図 (S = 1 : 5,000)



参考文献

八千代市教育委員会「平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報」(1995年3月)

3. 浅間内遺跡（第5次確認調査・第4次本調査）

遺跡の立地と概要

浅間内遺跡は、市域の南部、新川の東岸に位置する。北を新川の低地から東に入る小谷に、南を入り江状の辺田前・沖塚前低地に画された台地上に立地する。この台地上西端には浅間神社が鎮座し、地名の由来となっている。

第5次確認調査の区域は、北の小谷に臨む台地上の縁辺部、標高22.4mの地点である。現況は平坦な畑地で、表面採集により縄文時代中期の土器片・土師器片・陶器片合わせて10点を得た。しかしここは南～西隣に広がる台地よりも2.5～3.5mほど低くなっており、台地上との間には段差がある。このような地形観察と土地所有者の話により、地形改変が行われていることは明らかである。

第4次本調査の区域は、平成11年度に第4次確認調査を行った区域である（八千代市教委2000）。浅間神社の周辺、標高25m前後の台地上のわずかな平坦面と斜面地である。

第5次確認調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、幅2mのトレンチを4本設定し、トレンチNoは第4次確認調査の続きで、それぞれ13T～16Tとした。約94㎡を掘削し、遺構検出に努めた。

調査期間は、平成12年5月30日～31日である。30日重機表土剥ぎ作業、31日遺構検出作業・トレンチ土層調査・調査区平面実測である。

第5次確認調査の概要

各トレンチとも上層0.7～1.2mは暗褐色の埋土で、この土に稀に土器片が混入しており、13Tから縄文土器片2点、16Tから縄文土器片5点・土師器坏底部1点が出土した。それ以下は黄褐色の砂層でその深さは2m以上に達していた。調査区は、台地側を削り平坦面を作った上に暗褐色土を乗せて畑地にしたものであろう。旧地表は完全に削り取られ、遺構は残っていないという点を確認した。

第14図3は13T出土の阿玉台式土器片、4は16T出土の撚糸文土器片（井草II～夏島式）である。

第4次本調査の方法と経過

第4次確認調査の結果を受けて、3T・7T・10T～12Tを拡張し、各検出遺構を調査した。

調査期間は、平成12年5月30日～6月21日である。調査経過は、30日重機表土剥ぎ作業、2日清掃検出作業、5日～16日住居跡・ピット調査、19日～20日ピット調査、21日埋め戻し・器材撤収である。



第9図 浅間内遺跡位置図（S=1：5000）

第4次本調査の概要

本調査の区域の東隣では、平成6～7年度に大規模な調査を実施している。遺構No.はその調査で付けたNo.の続きである。

竪穴住居跡 確認調査3Tで検出済み。遺構No.73D。北西コーナー付近を溝(25M)によって壊されている。平面形態は、南北3.0m、東西2.9mのほぼ正方形。深さは床面の最深部が0.55m。主軸方向はW-7°-N。床面はほぼ平坦でロームを主体とした土による貼り床。貼り床は薄く、平均2～3cm。土間状の硬化面が中央部に広がる。壁はほぼ垂直。北壁・東壁に非常に平坦な部分があり、板が立っていたかのような印象を受けた。カマドは1基、西壁の北寄りにある。25Mによって破壊されており、残存状態は良くなかった。カマドを構成する砂と粘土の混じり合った土、火床、焼土を確認した。火床は床面とほぼ同じ高さで、壁溝を埋めた土の上にあった。ピットは3基で、P1は径28cm、深さ36cm、出入口に伴うものか。P2は径20cm、深さ35cmの尖底。P3は径60cm×24cm、深さ8cm。掘り込みのしっかりした柱穴状のものは無かった。壁溝は幅10～40cm、深さ4～8cmで全周する。カマドの下でも検出されたがここはカマド構築の際に埋められたらしい。遺物は7点のみ。土師器坏の完形品が1点、その他は土師器甕の小破片である。第14図2に完形の坏を図示した。口径13.5cm、胴部最大径14.0cm、器高4.7cm、丸底である。外面は口縁付近が横ナデ、以下もナデ整形で、底面付近はヘラ削りである。内面はナデとミガキにより平滑である。内面の底部にはタール状の黒色物質が付着している。

ピット 12基検出。形態や覆土の状態から見て、縄文時代に属するものと考えたが、562P・563P・565P・566Pの覆土から出土したのは、1点ずつではあるがいずれも土師器片で、ピット群付近から出土した遺物も、土師器片6点、須恵器片1点であった。564Pは当初住居跡規模の遺構と考えたが、本調査の結果、焼土を伴う土坑となった。

発掘によって得られた遺物の総数は35点である。確認調査時の遺物を合わせても65点という少なさである。第14図1は10T出土の土師器甕の頸部で内面にわずかに刷毛目が観察できる。5は25M出土の端反りの皿の口縁部で志野釉が施されている。17世紀前半のものと考えられる。6は3T出土の瀬戸美濃の陶器小椀で19世紀後半、7は25M出土の砥石である。その他、地表面遺物としてイヌザクラの周辺で縄文土器片(阿玉台式)1点、土師器片5点、須恵器片3点を採集した。

その他の遺構など 25Mはごく新しい溝と考え、本調査の対象外としたが、73Dに交わる部分は掘削した。その結果、江戸時代に属する遺物や、付属施設の長方形の土坑などが明らかとなった。

確認調査時に9Tで検出した近世土坑は、平面形が方形になることを確認した。

浅間内遺跡では、過去の調査で旧石器時代遺物集中箇所が検出されているので、ピット群の区域に旧石器確認のテストピットを2箇所設定した。時間の都合でVI層(AT)までの掘削となったが、遺物は出土しなかった。

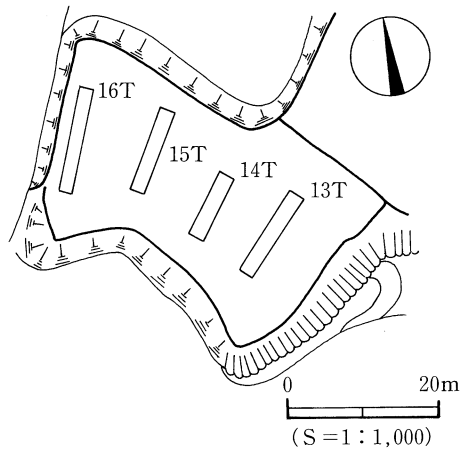
調査のまとめ

住居跡73Dは、カマドがややコーナーに寄っている点や、遺物量が極端に少ない点が特徴である。完形の坏1点は、7世紀末、古墳時代終末のものと同判断され、住居跡の時期もこれに近いものと考えられる。東側の区域では、古墳時代後期の住居跡は7軒前後、奈良・平安時代の住居跡は約30軒発見されている。未整理のため明確には言えないが、73Dが時間的な間隙を埋める資料になり得るのではないかと考えられる。

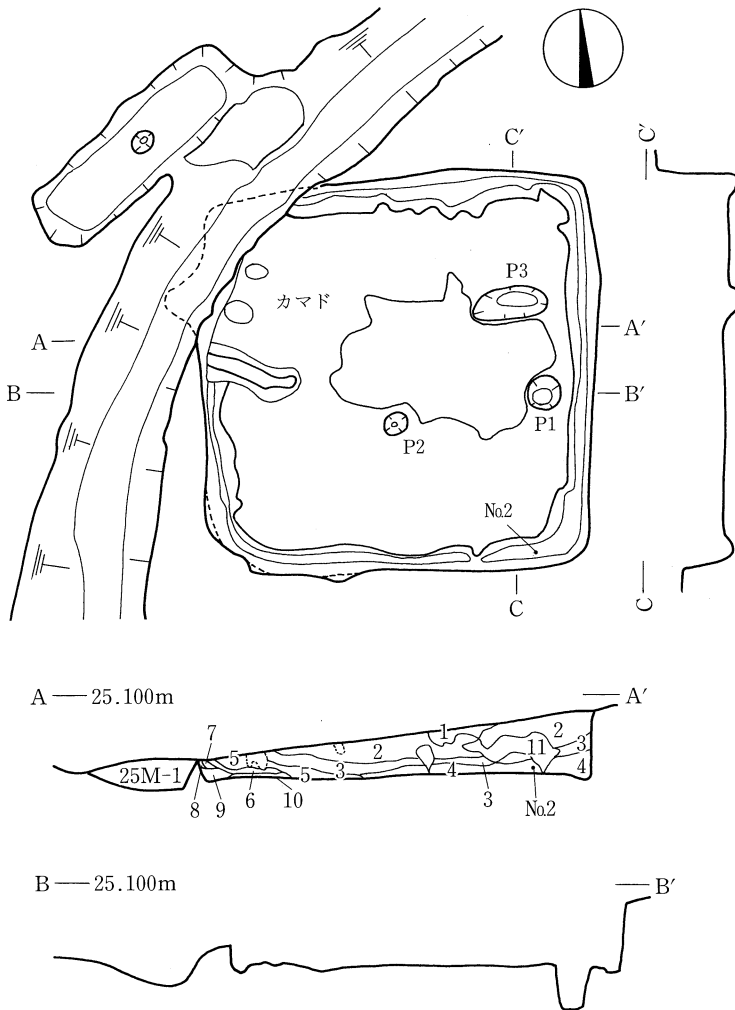
ピット群に関連する土師器片には、特に古墳時代前期に属すると見られる刷毛目のついたものが散見された。当該時期に属する遺構は、北の台地先端部に浅間内1号墳があり、古墳からはやや離れて住居跡が3軒前後存在した。これらの遺構と関連のある地点としてこのピット群を捉えておきたい。

参考文献

八千代市教育委員会(2000)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』



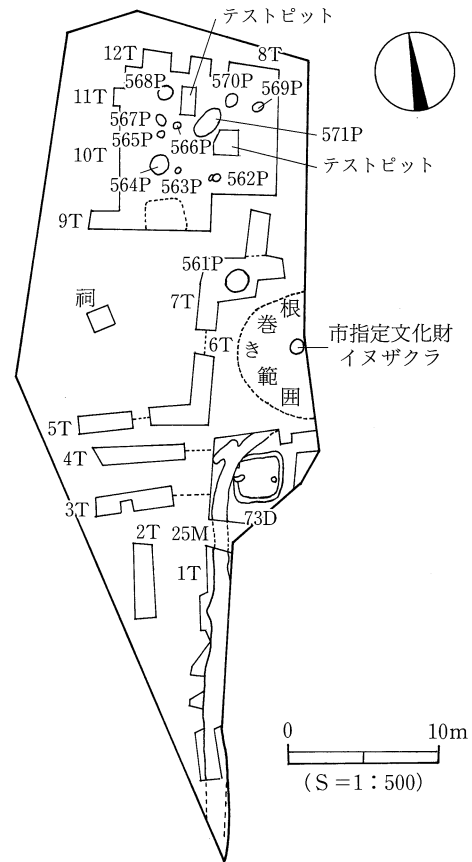
第10図 浅間内遺跡(第5次)トレンチ配置図



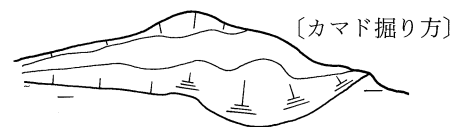
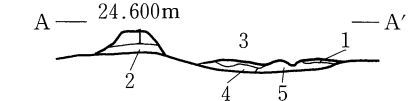
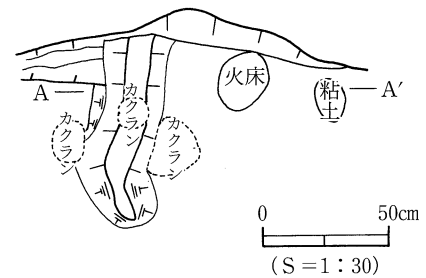
第12図 浅間内遺跡73D遺構実測図

73D覆土土層

1. 暗褐色 径1~5mmの黄色粒子を含む。
2. 褐色 径1~3cmのロームブロック含む。径2mmの黒色粒子を含む。
3. 褐色・暗褐色 径1~3cmのロームブロック2より多く含む。所々に暗褐色土がにじむ。
4. 褐色 径1cmのロームブロック含む。
5. にぶい褐色 カマドの土が崩れたものである。砂と粘土が混じり合う。焼土少量含む。
6. にぶい褐色・褐色 径5~10mmの焼土ブロックを含む。
7. にぶい褐色 カマドを構成する土。砂と粘土が混じり合う。焼土粒子極少量含む。5に似る。
8. 褐色 ローム混じりの崩落土。
9. 褐色 均質な土。粘りが強いが粘土のように見えない。カマドの基盤になる土。
10. 褐色 ロームブロックを主とし、褐色土が間に入り込んだような土。
11. 褐色 径1cmのロームブロック含む。根を抜いたため脆くなった部分。



第11図 浅間内遺跡(第4次)遺構検出状況図



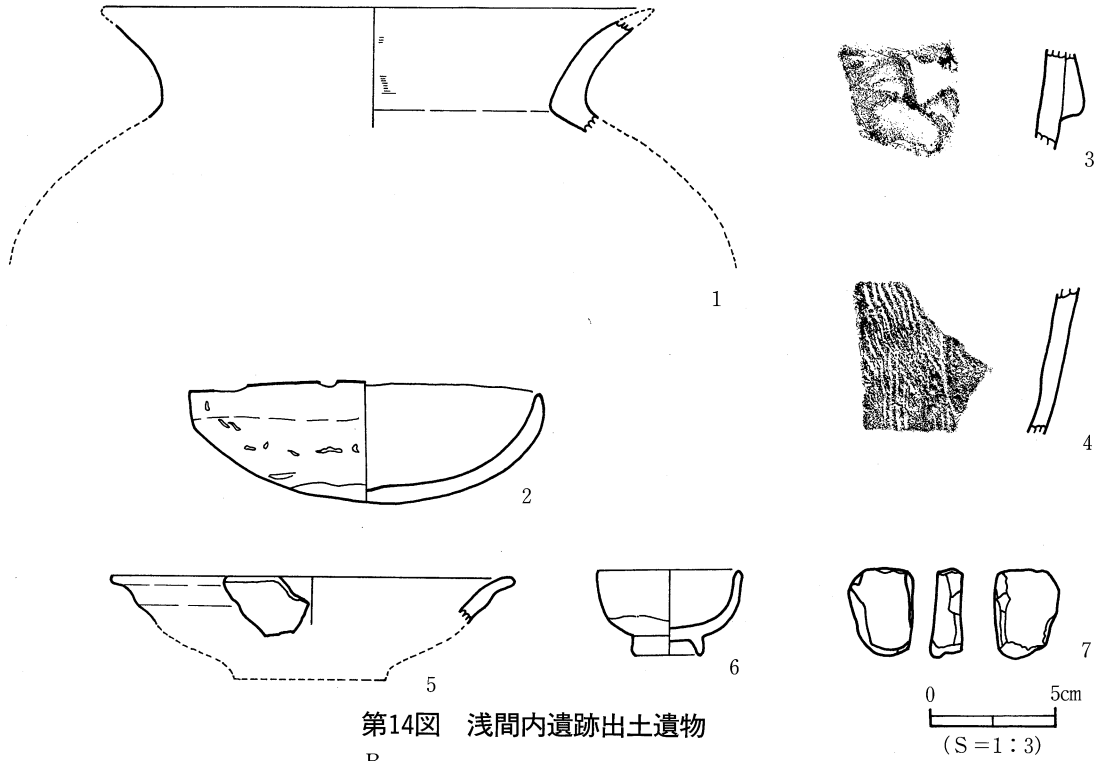
第13図 浅間内遺跡73Dカマド実測図

25M覆土土層

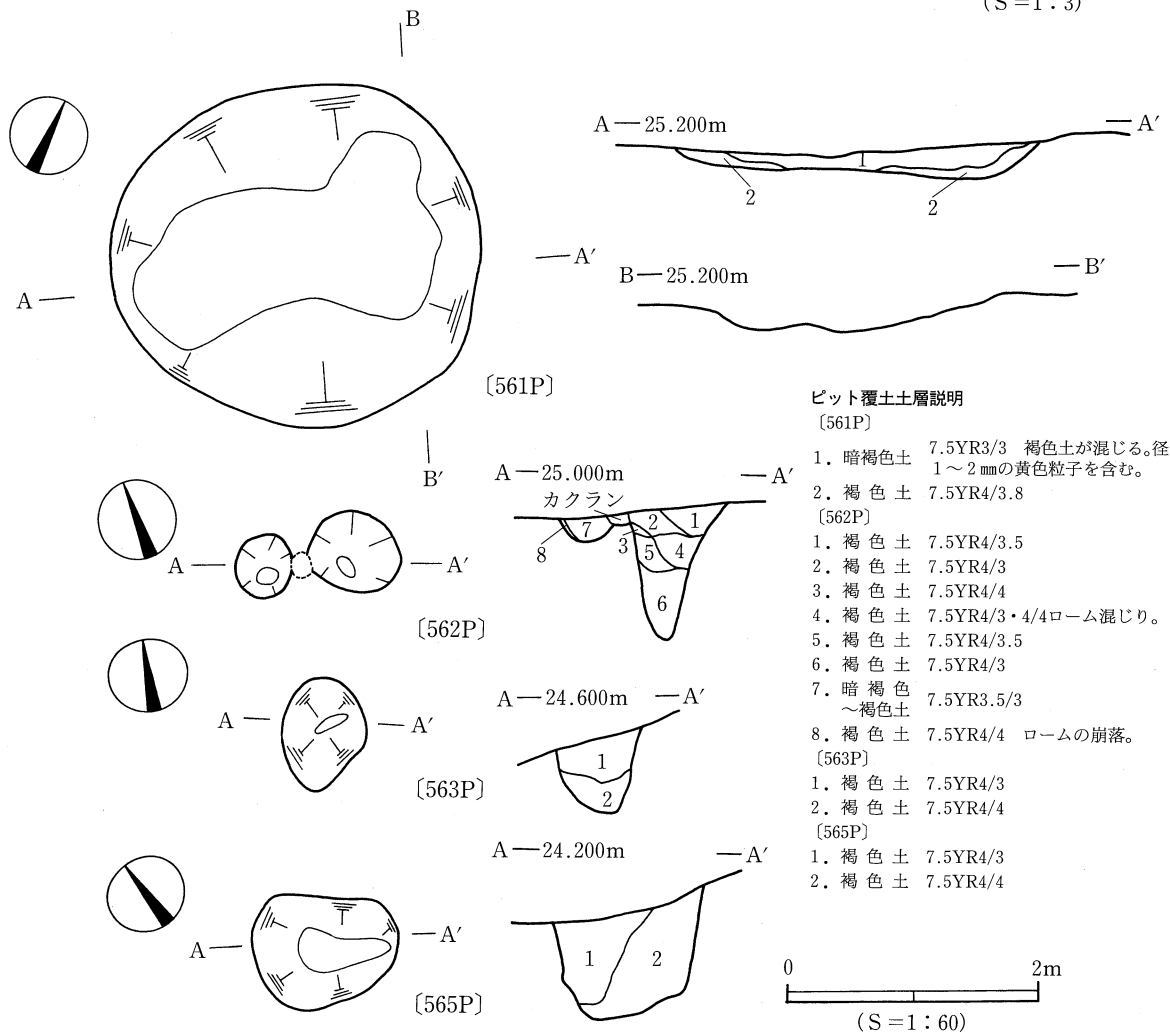
1. 暗褐色 径2cmのロームブロック・径1~2mmの黄色粒子を含む。焼土粒子・炭化物少量含む。

73Dカマド土層

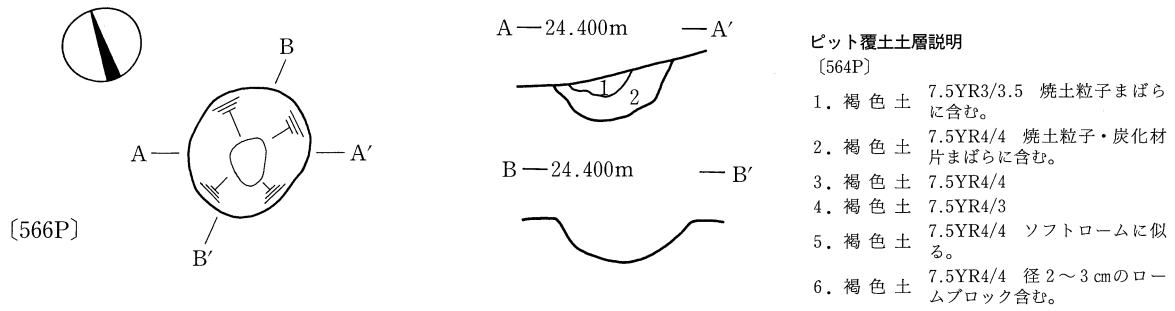
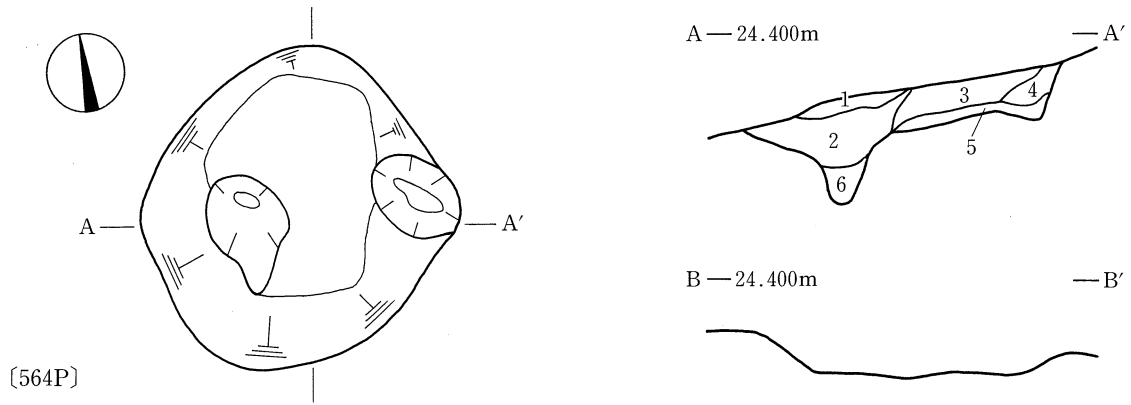
1. にぶい褐色 カマド袖部の主体となる土。砂と粘土が混じり合う。焼土の影響で若干赤い。
2. 褐色 袖の基盤の土。ローム混じり。
3. 暗赤褐色 火床部分。焼けて赤色化した径3~4cmのロームブロック・焼土粒子多く含む。
4. 褐色 焼土粒子含む。
5. 褐色 径5cmのロームブロック含む。焼土粒子ごく微量含む。



第14図 浅間内遺跡出土遺物



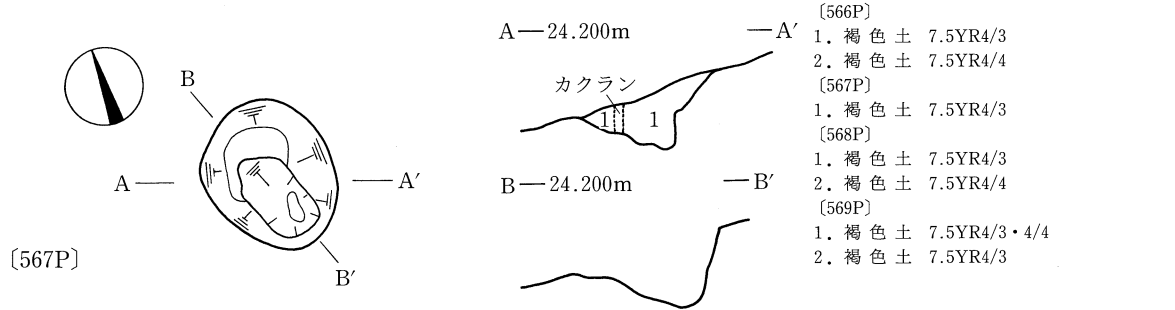
第15図 浅間内遺跡ピット実測図(1)



ピット覆土土層説明

[564P]

1. 褐色土 7.5YR3/3.5 焼土粒子まばらに含む。
2. 褐色土 7.5YR4/4 焼土粒子・炭化材料まばらに含む。
3. 褐色土 7.5YR4/4
4. 褐色土 7.5YR4/3
5. 褐色土 7.5YR4/4 ソフトロームに似る。
6. 褐色土 7.5YR4/4 径2~3cmのロームブロック含む。



[566P]

1. 褐色土 7.5YR4/3
2. 褐色土 7.5YR4/4

[567P]

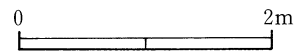
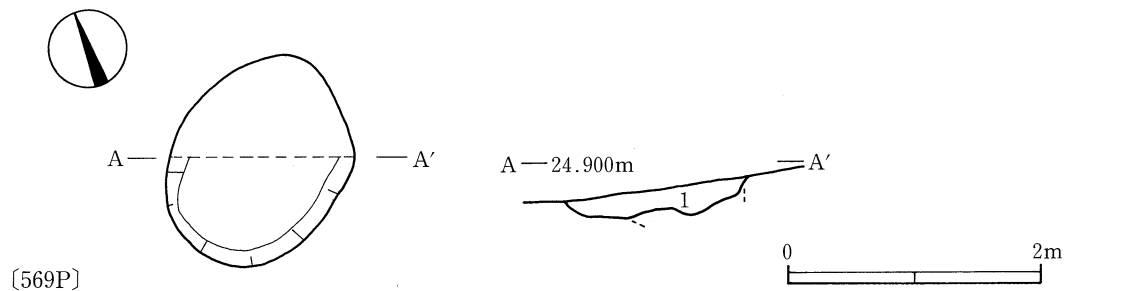
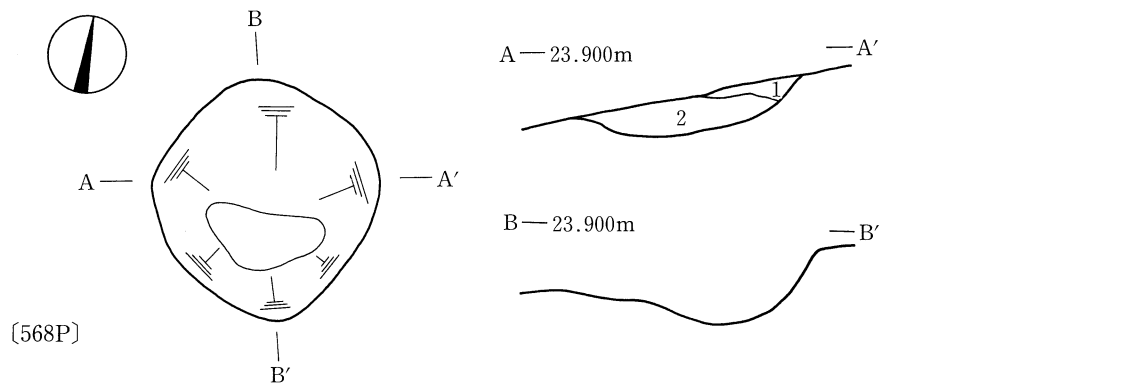
1. 褐色土 7.5YR4/3

[568P]

1. 褐色土 7.5YR4/3
2. 褐色土 7.5YR4/4

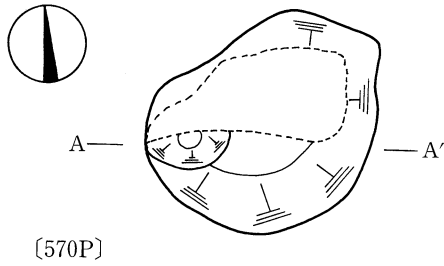
[569P]

1. 褐色土 7.5YR4/3・4/4
2. 褐色土 7.5YR4/3

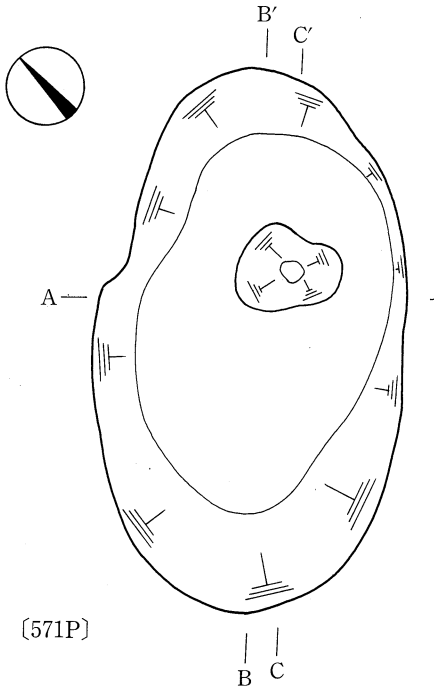


(S=1:60)

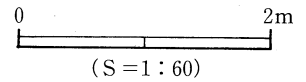
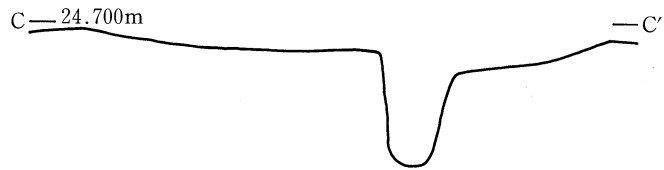
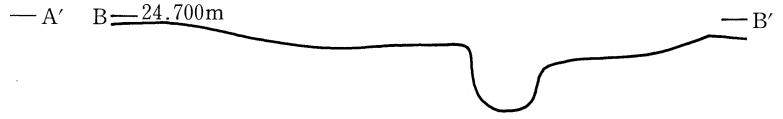
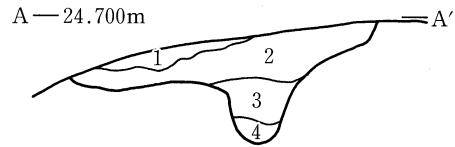
第16図 浅間内遺跡ピット実測図(2)



[570P]



[571P]



第17図 浅間内遺跡ピット実測図(3)

ピット覆土土層説明

[571P]

1. 褐色土 垂角塊状。
2. 褐色土 垂角塊状。
3. 褐色土 垂角塊状。
4. 褐色土 垂角塊状。

ピット覆土土層説明

[571P]

1. 褐色土 7.5YR4/3
2. 褐色土 7.5YR4/4
3. 褐色土 7.5YR4/3.5
4. 褐色土 7.5YR4/4

第1表 浅間内遺跡第4次本調査ピット一覧

(単位:m)

遺構No	形状	上面規模	底径	深さ	遺物その他
561P	凹み状	1.46×1.38	1.25×0.75	0.15	7T 拡張区所在
562P-A	尖底状	0.37×0.31	0.10×0.06	0.52	土師器片1点(坏胴部)
562P-B	丸底状	0.25×0.23	0.10×0.08	0.15	
563P	尖底状	0.45×0.34	0.14×0.04	0.30	土師器片1点(甕胴部)
564P	凹み状	1.30×1.25	0.88×0.65	0.15~0.41	薄い焼土・小ピットあり
565P	船底状	0.60×0.45	0.36×0.14	0.41	土師器片1点(甕胴部)
566P	丸底状	0.54×0.44	0.20×0.13	0.17	土師器片1点(甕胴部)
567P	尖底状	0.62×0.51	0.13×0.05	0.32	有段
568P	凹み状	0.97×0.90	0.47×0.22	0.23	
569P	トライ状	(0.67)	(0.50)	0.12	約1/2掘りすぎ
570P	凹み状	1.02×0.75	-	0.10	底面掘りすぎ
571P	凹み状	2.15×1.24	1.51×0.82	0.14~0.48	小ピットあり

4. 上谷津台南遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

上谷津台南遺跡は佐倉市との市境を流れる小竹川の西岸の台地上先端部に位置する。標高は約26mで、現況は山林である。遺跡の北西には小支谷を隔てて上谷津台遺跡（調査例なし）、南東約100mの地点から縄文時代を中心とする稲荷前遺跡、二重堀遺跡、新林遺跡等が展開する。本遺跡は過去に3地点の調査が実施され、陥穴を含む4基の土坑等が検出されている。詳細については、平成8年度市内遺跡発掘調査報告書及び平成12年度市内遺跡発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査は遺跡の北東部の周辺部にあたり、上谷津台遺跡との境界を接する、或いは一部重なる部分に位置する。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に合わせ5m×5mのグリッドを設定した。その区画をもとに2m×4mのトレンチを10m間隔で配置し、遺構検出に努めた。また、必要に応じて増設・拡張等を行った。

調査期間は、平成12年6月21日～同年7月5日である。6月21日に機材搬入等環境整備を行い、調査前の現況写真撮影及びグリッド設定に着手する。6月22日、グリッド設定を終了し人力による包含層調査を開始する。6月26日から、重機による表土除去作業を実施し、並行して遺構検出作業を開始する。6月27日には遺構検出作業を終了し、写真撮影等の記録作業を開始し、6月29日に、確認調査を終了する。また、同日から遺構調査に着手し7月4日に遺構調査を終了する。7月5日に機材撤収及び埋め戻しを行い、調査の全工程を終了する。



第18図 上谷津台南遺跡 d 地点位置図 (S=1:5,000)

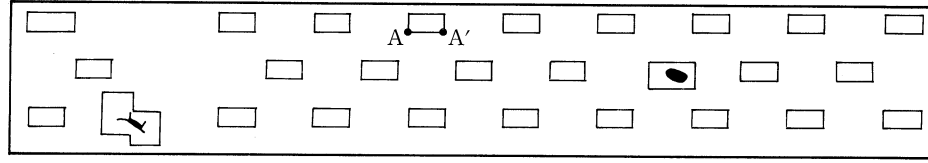
調査期間は、平成12年6月21日～同年7月5日である。6月21日に機材搬入等環境整備を行い、調査前の現況写真撮影及びグリッド設定に着手する。6月22日、グリッド設定を終了し人力による包含層調査を開始する。6月26日から、重機による表土除去作業を実施し、並行して遺構検出作業を開始する。6月27日には遺構検出作業を終了し、写真撮影等の記録作業を開始し、6月29日に、確認調査を終了する。また、同日から遺構調査に着手し7月4日に遺構調査を終了する。7月5日に機材撤収及び埋め戻しを行い、調査の全工程を終了する。

調査の方法と経過

本遺跡の基本層序は、I表土、II黒褐色土、III黄色褐色土(新期テフラ層)、IV暗褐色土、Vソフトローム層である。遺構検出作業は、III層上面及びV層上面で行った。その結果として、縄文時代の陥穴2基を検出することができた。また、遺物包含層は検出することができなかった。以下、検出された遺構についての記述に移りたい。

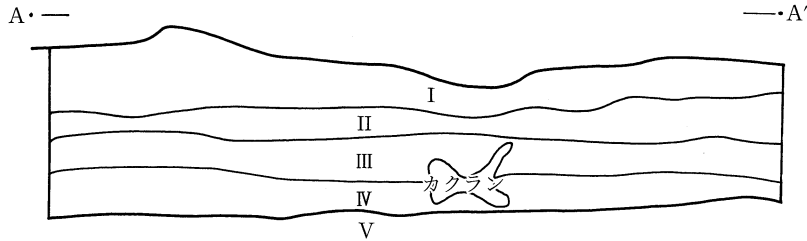
01P

調査区北西部に位置し、V層上面で検出する。遺構の上層部及び両端は既に削平を受け、規模・形態に



0 20m
(S=1:800)

第19図 上谷津台南遺跡 d 地点遺構検出状況図

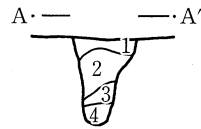
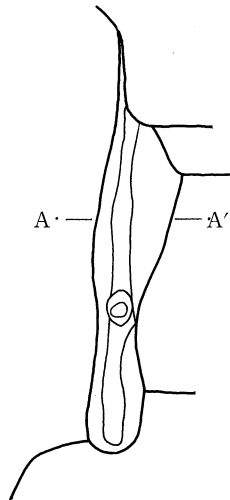


0 1m
(S=1:40)

第20図 上谷津台南遺跡 d 地点土層断面図

土層説明

- I. 表土層
- II. 黒褐色土 黒色土に少量の暗褐色土がまざる。
- III. 黄褐色土 褐色土に多量のロームがまざる。新期テフラ層。
- IV. 暗褐色土 暗褐色土に少量の黒色土と微量のロームがまざる。

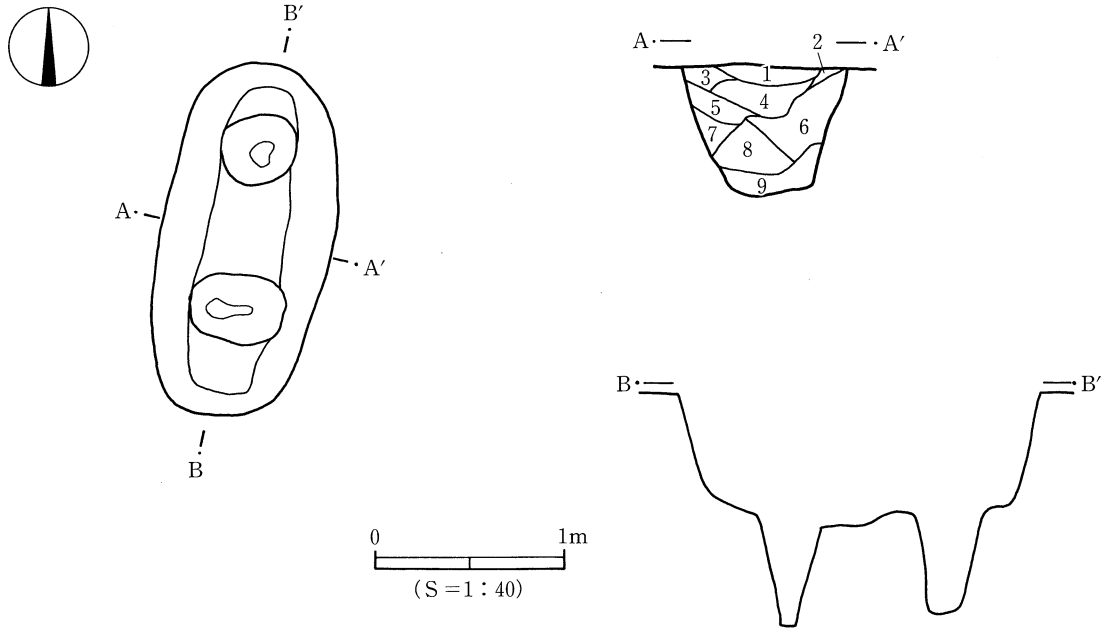


土層説明

- 1. 暗褐色土 暗褐色土に少量のロームがまざる。粘性、しまり共によわい。
- 2. 暗褐色土 暗褐色土に微量のロームがまざる。粘性、しまり共によわい。
- 3. 暗褐色土 暗褐色土に少量のロームがまざる。粘性、しまり共によわい。
- 4. 暗黄褐色土 暗褐色土に多量のロームがまざる。粘性強く、しまりよわい。

0 1m
(S=1:40)

第21図 上谷津台南遺跡 d 地点01P 遺構実測図



土層説明

- | | |
|----------|------------------------------------|
| 1. 暗褐色土 | 暗褐色土に微量のローム，黒色土がまざる。粘性弱く，しまり強い。 |
| 2. 暗黄褐色土 | 暗褐色土に少量のローム，微量の黒色土がまざる。粘性弱く，しまり強い。 |
| 3. 暗黄褐色土 | 2層に同じ。 |
| 4. 暗褐色土 | 暗褐色土に少量の黒色土，微量のロームがまざる。粘性弱く，しまり強い。 |
| 5. 暗褐色土 | 暗褐色土に少量のローム，微量のロームがまざる。粘性弱く，しまり強い。 |
| 6. 暗褐色土 | 暗褐色土に多量のローム，微量の黒色土がまざる。粘性弱く，しまり強い。 |
| 7. 暗黄褐色土 | 暗褐色土に多量のローム，微量の黒色土がまざる。粘性弱く，しまり強い。 |
| 8. 暗褐色土 | 暗褐色土に微量のローム，黒色土がまざる。粘性弱く，しまり強い。 |
| 9. 黄褐色土 | ロームに微量の黒色土，暗褐色土がまざる。粘性，しまり共に強い。 |

第22図 上谷津台南遺跡 d 地点02P 遺構実測図

ついでの詳細は不明である。残存している土坑の上場の最大長は約2.1m，幅約25cm，低部における最大長は約1.8m，幅約8cmであった。検出面からの深さは約40cmであった。低面はほぼ平坦で壁もほぼ垂直に立ち上がっていた。底面から約12cm×20cm，深さ5cm程度の浅い窪み状の楕円形のピットを検出している。土坑内の覆土は，4層に分層でき，最下層については人為的な埋め戻しが考えられる。遺物は出土しなかった。

検出状況，規模・形態から縄文時代の陥穴と考えられる。

02P

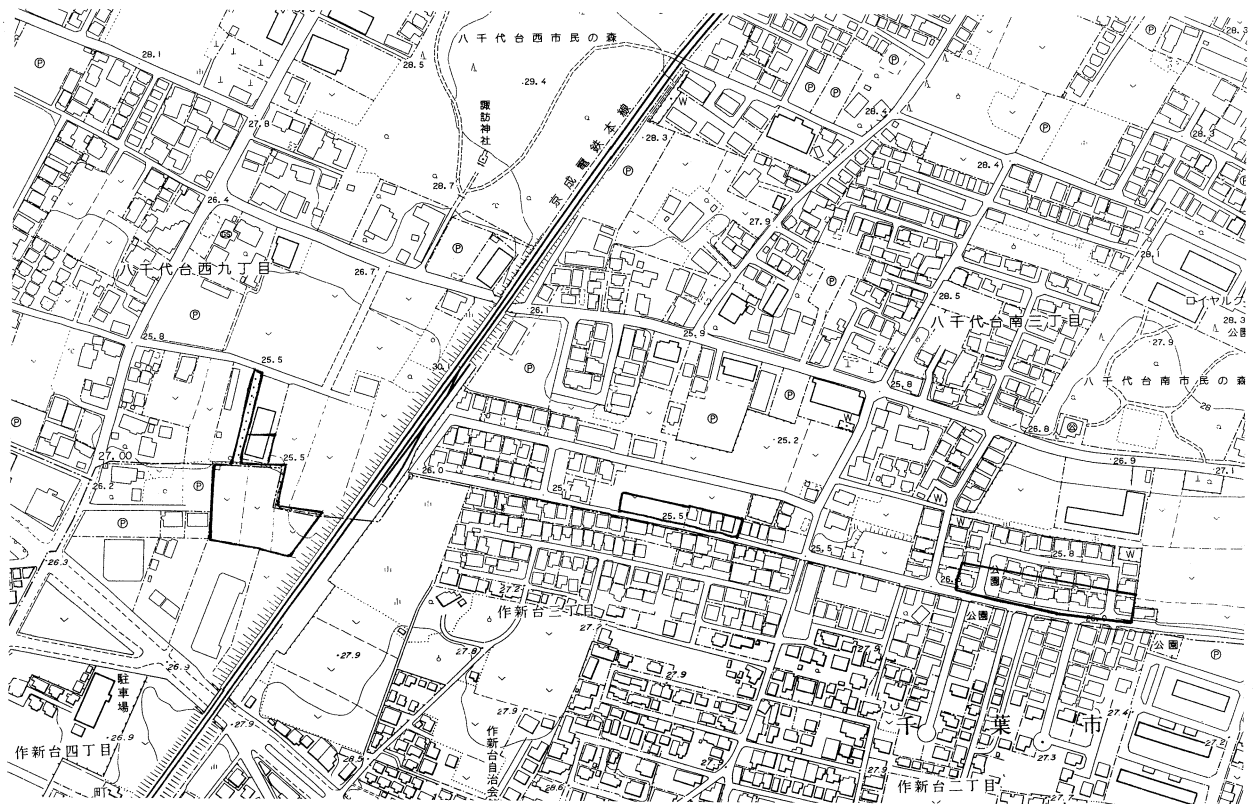
調査区南部に位置し，V層上面で検出する。長軸約1.9m×短軸1.0m，検出面からの深さ約0.6mの楕円形の土坑で，底部における最大長は約1.6m，幅0.4mであった。底部はほぼ平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部には，それぞれ40cm×40cm，深さ50cm，50cm×35cm，深さ50cmの小穴を2基検出している。土坑内の覆土は，9層に分層でき，人為的な埋め戻しが考えられる。遺物は出土しなかった。

検出状況，規模・形態から縄文時代の陥穴と考えられる。

調査のまとめ

今回の調査で2基の陥穴を調査することができ，上谷津台南遺跡での陥穴の調査例は合計4基となった。遺構・遺物の検出例の少ない本遺跡で検出される主な遺構が陥穴であることは，本地域が縄文時代に狩猟の場として利用されていたことを示しているように思える。また，狩猟の場としての広がりや，居住域との関連等，具体的な様相については，陥穴の立地，形態分類，詳細な時期・用途の決定など，解決しなければならない課題が多い。上高野地区は近年調査例が増加している地区でもあり，今後，本遺跡にとどまらず，広く上高野地区での類例を積み重ね，分析を加えていきたい。

5. 高津新田野馬堀遺跡 i 地点



第23図 高津新田野馬堀遺跡 i 地点位置図 (S=1:5,000)

遺跡の立地と概要

高津新田野馬堀遺跡は八千代市南西部の千葉市との市境に沿って所在する。この一帯は江戸時代に「小金牧」として、幕府が馬の放牧場としていたところであった。「小金牧」の範囲は時期により異なるが、最大で北は野田市から千葉市にまで広がる広大な牧で、そのいちばん南にあるのが「下野牧」と呼ばれている区域である。今回の調査区域は下野牧の中でも、南の端に位置している。牧は千葉市側を取り囲むように作られ、八千代市側は牧の外側となっている。

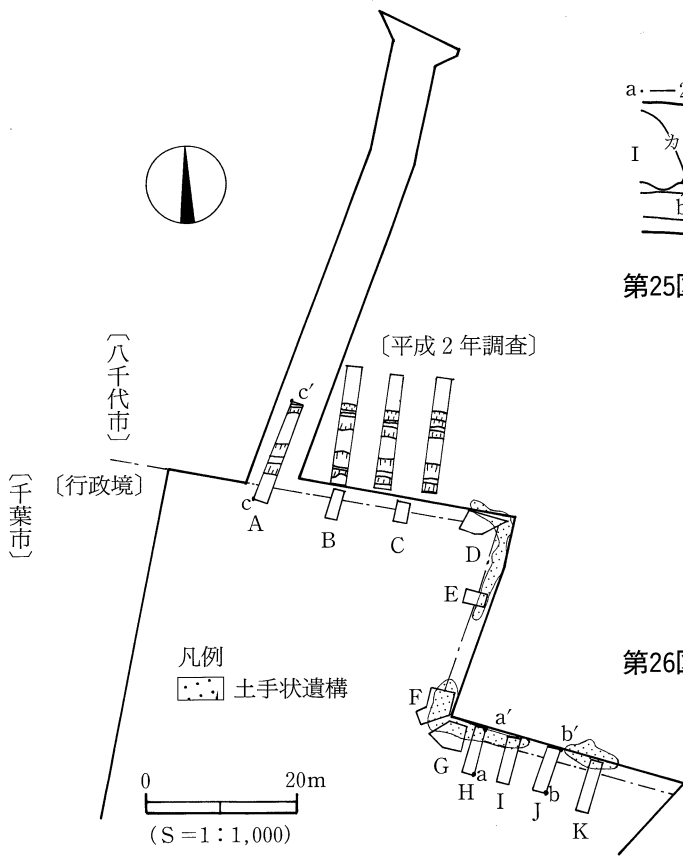
調査の発端となった工事は八千代市側で2mほどの幅の市境と進入路約6m×65mの区域の計1,507㎡でその内208㎡が調査の対象となっていた。工事区域の大部分が千葉市側で行われる工事であった。

調査区域は平成2年7月に実施された調査区域(d地点と呼称する)に隣接している。この地点の調査(第24図)では市境に沿って野馬除土手に伴う溝が3条検出されており、今回の区域にもその続きが同様に検出されるものと判断された。また、工事区域は、市境が千葉市側に凸状に張り出している場所にあたっており、市境に沿って低い土塁状の盛土も確認されていたため、野馬除けの土手が市境と同様の形状をしているものと想定されていた。

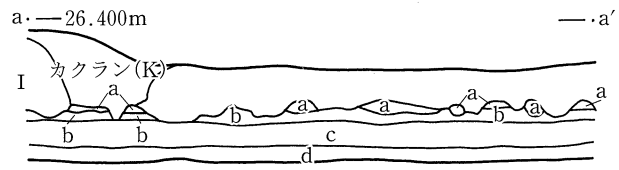
調査の方法と経過

野馬除土手堀は、市境に沿って所在するため、市境に直行するようにトレンチを任意に設定することとした。しかし、調査区域が市境や侵入路など幅が狭く掘削が困難なため、千葉市教育委員会と調整を図りながら、協力を得て調査を進めることとなった。千葉市教育委員会では、野馬除土手以外の埋蔵文化財の所在を想定していなかったため、八千代市教育委員会が設定し、掘削したトレンチを必要に応じて延長して調査が行われることとなった。

8月22日、現地立会、機材搬入、草刈りを行う。23日草刈り、測定の準備。24日地形測量開始。25日地形測量、Dトレンチ掘削開始。28日バックホーによる掘削も同時に開始。29日調査区一番西側のAトレンチの溝の調査を開始する。30日Aトレンチの溝の調査完了、セクション実測、調査区東端、京成本線線路際のJトレンチの落ち込みを調査開始。9月1日Aトレンチの一部で2m以上の深さになったため、調査終了後埋め戻し。4、5、6、



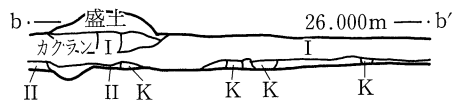
第24図 高津新田野馬堀遺跡 i 地点遺構検出状況図



第25図 高津新田野馬堀遺跡 i 地点Hトレンチ土層断面図

I. 表土土層説明

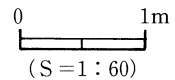
- a. 黒褐色土 7.5YR 3/2 粘性強く、しまり普通。ローム粒をわずかに含む。
- b. 暗褐色土 7.5YR 3/4 粘性強く、しまり普通。ローム粒、ロームブロックを多含する。
- c. 黒褐色土 7.5YR 3/1 粘性、しまり共に強い。粘土質土層。
- d. 黒色土 7.5YR 2/1 粘性、しまり共に強い。粘土質土層。



第26図 高津新田野馬堀遺跡 i 地点Jトレンチ土層断面図

I. 表土層土層説明

- I. 極暗褐色土 7.5YR 2/3 粘性、しまり共に弱い。ローム粒を含む。
- II. 暗黄褐色土 ソフトローム層。



7日雨により調査中止。8日(財)千葉市文化財調査協会の調査実施。遺構が検出されないため調査終了。11日、雨のため調査中止。12日調査完了、機材撤収。

調査の概要

調査区の土層は、表土層に暗褐色土の耕作土が確認され、以下、すぐにソフトローム層となるものであった。

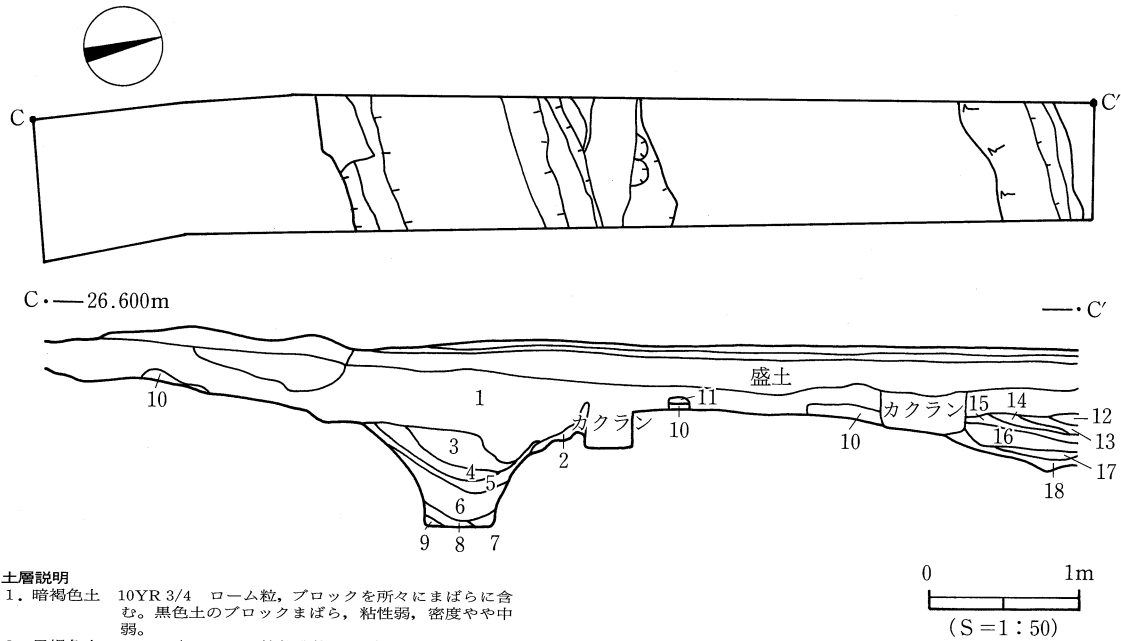
調査の結果、土手の残存とみられた土塁状のものは、土層観察によると盛土中にビニールなどの混入がみられ、最近の盛土が大半であると判断された。そのため、野馬除土手自体を確認することはできなかった。また、EトレンチからJトレンチまでの間でも、野馬除土手に伴う堀の検出もみられない。

Aトレンチにおいて、D地点で検出された溝のうち2条の続きが検出されている。1号溝はAトレンチの南側で検出されている。現地表面から2m10cmほどの深さがあり、幅は溝の確認面で1m10cm。土層は1層から8層まで自然埋没による土層がみられ、その後、いっきに埋め戻される。溝の底面は幅50cmほどの平坦面をつくるように掘り込まれている。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、次第に傾斜がつけられ、上部に行くにしたがって大きく開く。北側の壁の方が、やや急な斜面になっているように見える。

2号溝はAトレンチの北側で検出されている。緩い傾斜をもって掘り込まれ、浅く、かつ幅が広いので溝らしくない。さらに、その溝の中に一段掘り下げて幅30cm、深さ10cmほどの溝を作っている。

Jトレンチで検出された落ち込みは、千葉市側の調査によって明らかにされた。それによると、ローム面が北側に向けて傾斜し深くなる自然地形であることが明かとなった。そのため、ここまで谷津の先端部分が入り込んでいるものとみられる。

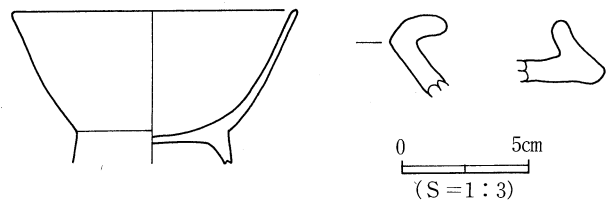
出土遺物はトレンチ内で出土しているほとんどが最近の陶磁器類であった。1から3は1号溝の自然堆積した土層の上層部からの出土である。1は肥前産の染付け碗、高台からやや膨らみをもつが、ほぼ直線的に立ち上がり口縁部にいたる。外面は松の文様が描かれ、内面の底面には帆かけ舟らしき図柄が描かれる。19世紀代のものである。2は瀬戸・美濃産の壺類のものとみられる。内外面ともに茶褐色の釉がかかる。3は水鉢の口縁、内外面ともに透明の釉をかける。



第27図 高津新田野馬堀遺跡 i 地点Aトレンチ土層断面図

土層説明

1. 暗褐色土 10YR 3/4 ローム粒, ブロックを所々にまばらに含む。黒色土のブロックまばら, 粘性弱, 密度やや中弱。
2. 黒褐色土 10YR 3/1 ローム粒部分的にまばらに含む。ロームブロック少量含む。密度中強。粘性弱。
3. 暗褐色土 10YR 3/3 ローム粒, ブロックを多量に混入。密度中強。粘性弱強。部分的に黒褐色土(10YR 3/1)を混入する。
4. 暗褐色土 7.5YR 3/3 ローム, ブロックを多量に密度中強。粘性やや中。
5. 暗褐色土 10YR 3/3 ローム, 小ブロックをまばらに混入。密度中強。粘性中強。
6. 褐色土 7.5YR 4/4 暗褐色土をまばらに含む。ローム, 小ブロックを多量に含む。粘性なし。密度密で硬くしまっている。土手廃棄後この層が残っていたものと推定。
7. 黒褐色土 7.5YR 3/1 ローム粒まばら。密度中弱。粘性やや弱。
8. 暗褐色土 7.5YR 3/3 ロームブロック, 粒子をやや多く混入。密度中弱。粘性やや弱。
9. 暗褐色土 7.5YR 3/4 ローム粒をわずかに混入。密度中弱。粘性弱。
10. 明褐色土 7.5YR 5/6 密度密。粘性なし。
11. 黒褐色土 10YR 5/6 ローム粒, 大ブロックをわずかに含む。密度中強。粘性弱弱。
12. 黒褐色土 10YR 3/1 ローム粒まばら。密度中強。粘性弱弱。
13. 暗褐色土 10YR 3/3 ローム粒まばら。ブロック少量。密度中弱。粘性弱弱。
14. 黒褐色土 10YR 3/1 ローム粒少量。密度中弱。粘性弱弱。
15. 暗褐色土 10YR 3/3 ローム粒まばら。褐色土多く含む。密度中強。粘性弱弱。
16. 暗褐色土 10YR 3/3 ローム粒, 褐色土少量含む。密度中弱。粘性弱弱。
17. 暗褐色土 10YR 3/4 16層よりやや明るい。ローム粒少量, 褐色土やや多い。密度中弱。粘性弱弱。
18. 褐色土 10YR 4/4 17層より明るい。ローム粒まばら。褐色土やや多い。密度中弱。粘性弱弱。



第28図 高津新田野馬堀遺跡 i 地点出土遺物

調査のまとめ

今回の調査で、隣接するd地点において検出された野馬除土手の続きは確認することができたが、調査区における牧の全体の形状について明らかにすることはできなかった。前述のように当初、市境に沿って残る盛土が、野馬除土手の残存ではないかと考えられていたが、野馬除土手を示す証拠は出なかった。また、土手の両側にみられる溝についても今回の調査は調査区域の範囲が狭く、溝にまで達していなかったため検出できなかったものと考えられる。

本調査区域の東側に、かつて野馬除土手堀が現存していた頃、二重の土手であったことが確認されている。しかし、今回の調査において、1号溝と2号溝の間に土手が築かれていたと推定されるものの、さらに二重に土手を構築していたかどうかは不明である。

Jトレンチで確認された谷津は、現状の地形では伺い知ることができなかった。東側から芦太川の谷津が線路脇まで迫っていることから、その先端である可能性は高いとみられる。

今回の調査区域において牧が凹んでいることは、明治15年の陸軍迅速側図において、野馬除土手のラインがこの部分で凹んでいることと符号している。しかし、残念ながら今回の調査においてその事実は明らかにすることができなかった。野馬除土手の形状については今後の調査に期したい。さらに、なぜこの部分において、牧を凹ませる必要があったのか、谷津の存在とも関連して、今後の課題としておきたい。

6. 麦丸遺跡 d 地点



第29図 麦丸遺跡 d 地点位置図 (S = 1 : 5,000)

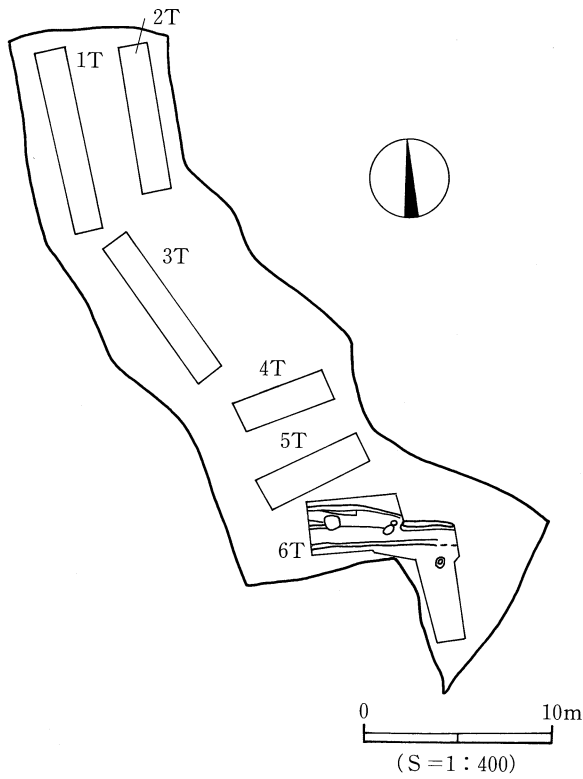
遺跡の立地と概要

麦丸遺跡は桑納川南岸を臨む台地上に位置する。遺跡の範囲は桑納川からの南北方向の谷津の東岸部分全体に及ぶ。今回調査部分は、遺跡の北側地区で標高20~21mの台地上平坦部から緩傾斜面に位置する。現在までに3地点において調査が実施されている。いずれも遺跡の南側地区に位置する。遺構の分布は希薄で、遺物は縄文土器等が少量出土している。今回調査をした隣接の畑では、縄文時代中期の土器片等を採集した。

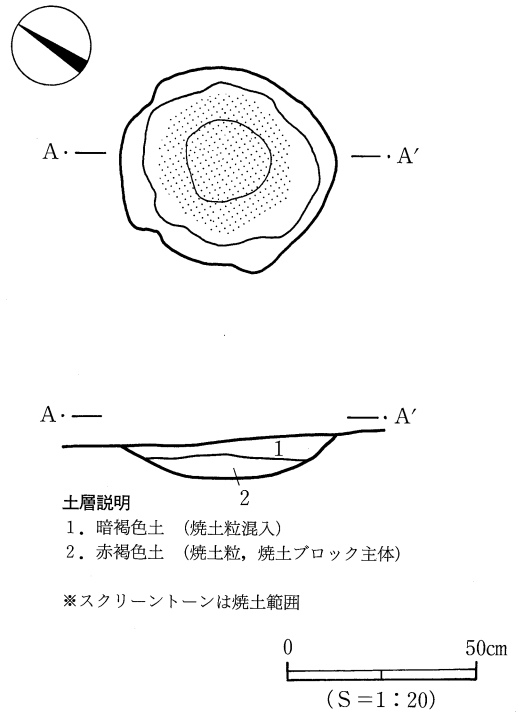
調査の方法と経過

伐採終了後、一部伐木かたづけと下草刈りを行った。調査は調査区の形状に沿って幅2mで任意の長さのトレンチを設定し、部分的に拡張して遺構確認を実施した。

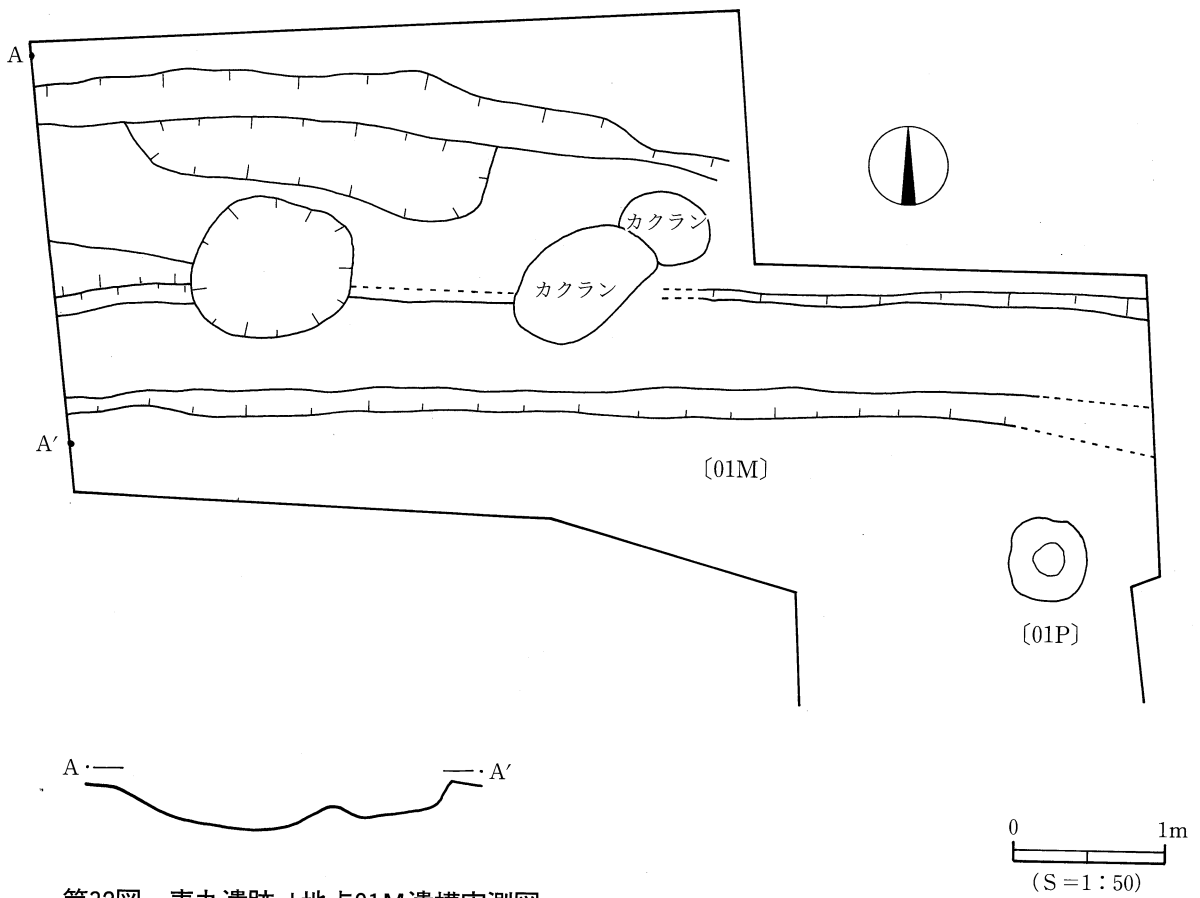
調査期間は平成12年9月28日~同年10月10日で、9月28.29日環境整備・トレンチ設定、10月4日重機によるトレンチ表土除去・6トレンチ拡張及び遺構確認作業、10月5.6日01M.01P遺構調査・平面図作成、10日一部下層調査と器材撤収により調査を終了した。



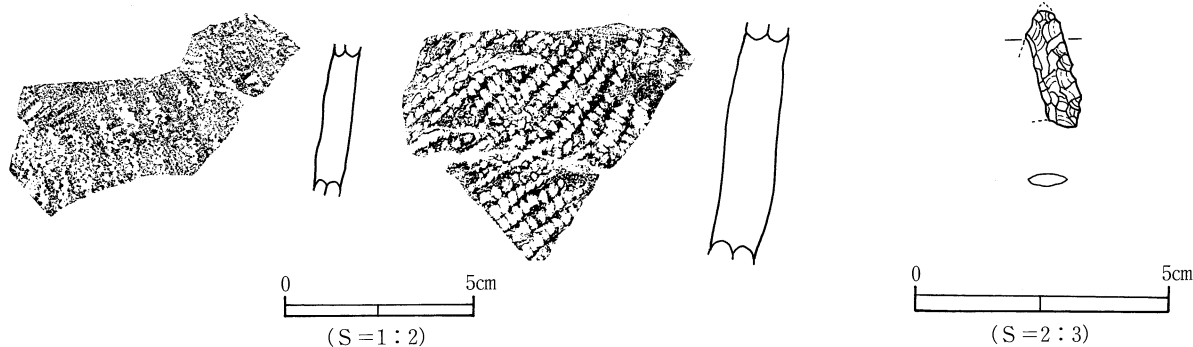
第30図 麦丸遺跡 d 地点遺構検出状況図



第31図 麦丸遺跡 d 地点01P 遺構実測図



第32図 麦丸遺跡 d 地点01M 遺構実測図



第33図 麦丸遺跡d地点出土遺物

調査の概要

本遺跡の基本層序は、I表土、II暗褐色土、IIIソフトロームで深さは30cm程度である。

調査の結果、6トレンチ拡張区から縄文時代早期の炉穴1基、時期不明の溝状遺構1条を検出した。以下各遺構について概要を記す。

炉穴は、略円形で55cm×57cm、深さ15cmの規模をもつ。覆土は2層で、上層が暗褐色土でごく少量の焼土粒を混入する。下層は底面まで焼土と焼土ブロックがおおう。厚さは7～8cmである。底面はソフトローム中であるがカリカリ状によく焼けている。遺物は出土していないが、覆土の状況と形態から縄文時代早期に想定できる。

溝状遺構は、等高線に直行する方向で、部分的に重複して2条検出された。幅は各々0.84m、1.42mで確認面からの深さは、各々0.3m、0.21mである。断面形態は、両者とも角度の緩い立ち上がりの壁面で、逆台形状である。覆土は両者ともローム粒の多い暗褐色土で締まっている。出土遺物はなく時期不明である。

遺物は、縄文時代の土器片を中心に49点出土している。時期は早期(三戸式・条痕文系)、前期(浮島式他)、中期(前半～後半)、後期である。主体となる時期はないが、しいて言えば前～中期であろうか。

ここでは浮島式と中期の土器片をあげた。石器では3点出土したが、石鏃を図示した。石材は黒曜石で、先端部と1/3欠損しているが復元長2.5cm、最大幅1.5cmである。

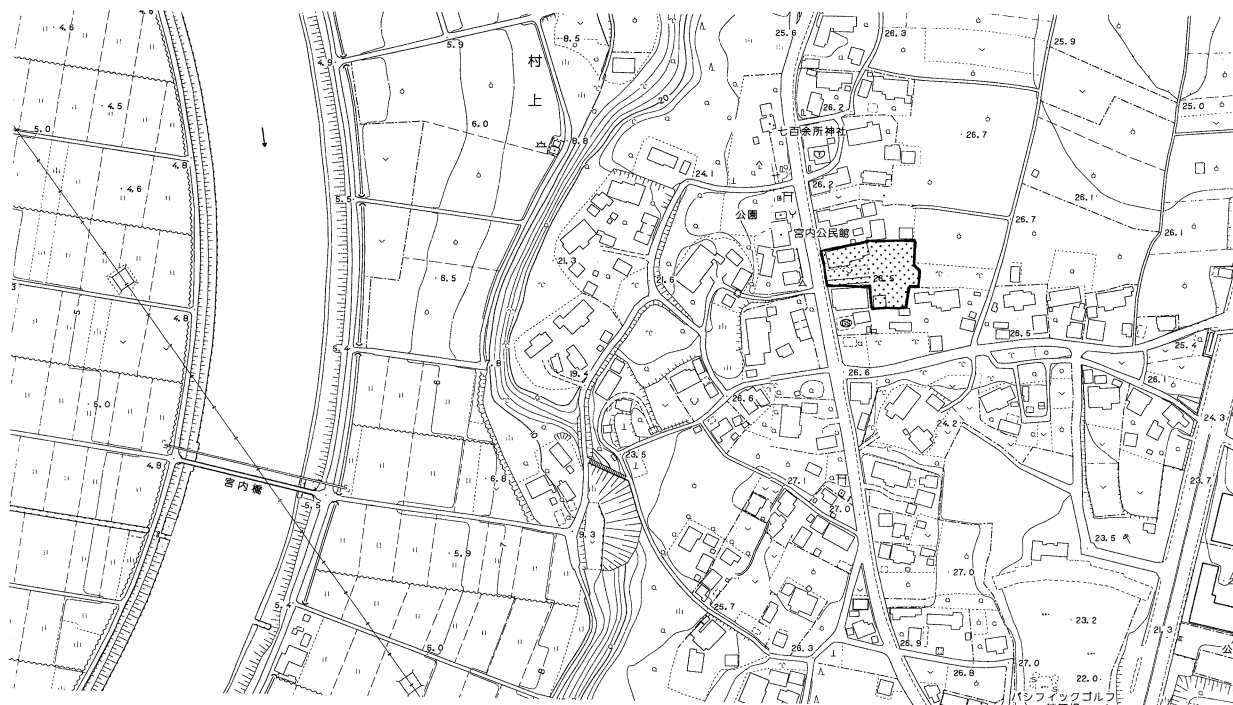
調査のまとめ

今回調査を行ったd地点では、緩傾斜面にも係わらず縄文時代の遺構、遺物がまとまって検出された。桑納川南岸を臨む台地上では、目を西側に転じてみると縄文時代前期後半～中期にかけての遺構、遺物が比較的まとまって検出されている傾向がある。麦丸遺跡d地点の今回の成果は、遺跡の主体が東側の台地平坦部にあると想定され、今後調査事例の増加により明らかになっていく可能性がある。

参考文献

八千代市遺跡調査会「千葉県八千代市麦丸遺跡」(1982)

7. 村上宮内遺跡b地点



第34図 村上宮内遺跡b地点位置図 (S = 1 : 5,000)

遺跡の立地と概要

村上宮内遺跡は、市域中央を流れる新川の東岸を臨む台地上平坦部に所在する。標高約20～26mで、水田面との比高差は14mである。現在までに1地点の調査が実施されている。谷津部分の調査であったため遺構は検出されなかったが、遺物は、縄文時代前期（浮島II式）、中期（加曾利E式）、後期（堀ノ内式・加曾利B式）、奈良・平安時代土師器・須恵器が出土している。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に沿って10m間隔に2×5mのトレンチを設定し、適宜その間にトレンチを設け遺構確認を行った。

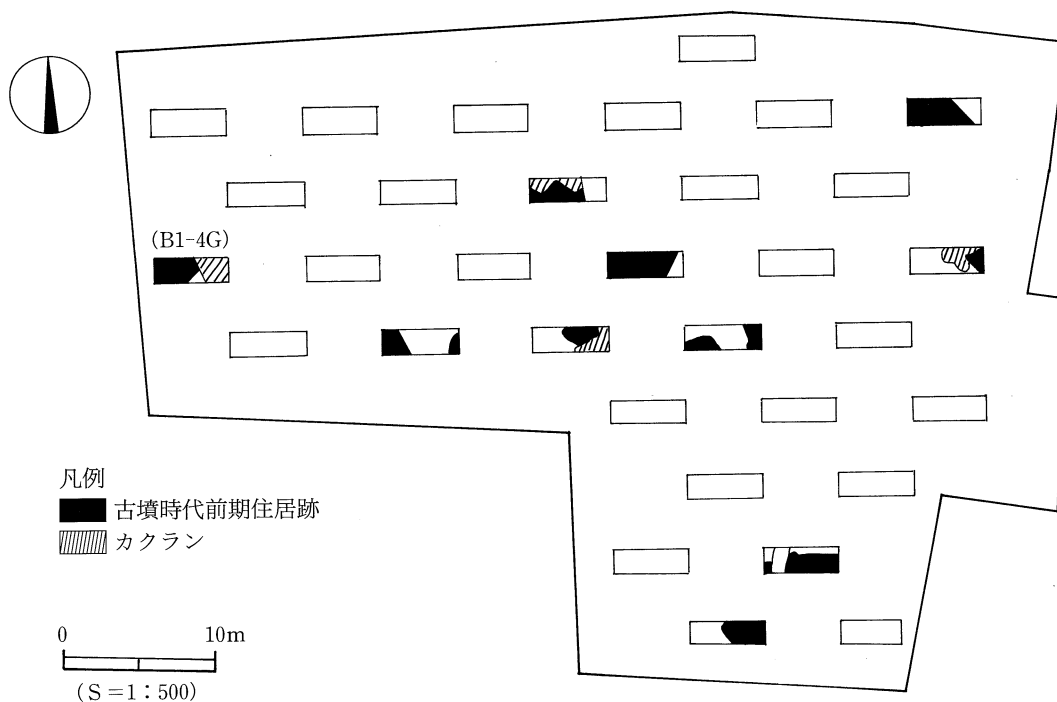
調査期間は平成12年10月26日～同年10月31日で、10月26日方眼杭及びトレンチ設定、27日重機によるトレンチ表土除去・プラン確認作業、30日プラン確認状況写真撮影・プラン精査・実測、31日器材撤収重機による埋め戻しにより調査を終了した。

調査の概要

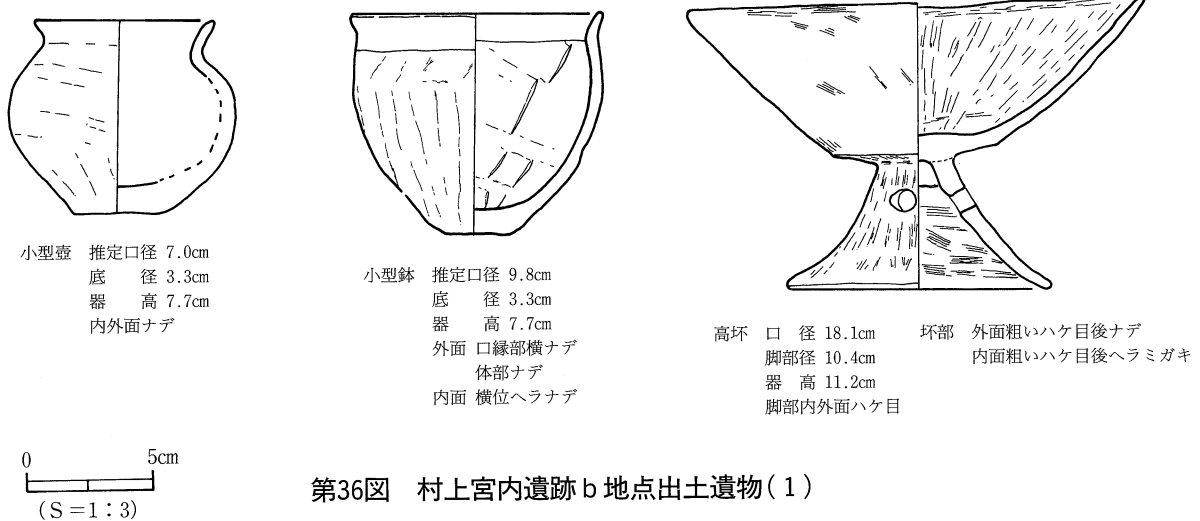
本遺跡では表土からソフトロームに至る自然堆積層がなく、客土のみでソフトロームに至った状況であった。遺構確認はソフトローム上面で行ったが、客土の堆積は0.8～1.4mの厚さをもっていた。

調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居跡11軒、時期不明の溝状遺構・土坑が各々1基検出された。住居跡の覆土は、黒褐色土で1～2mm大のローム粒を含み締まっている。確認面から床面までの深さは30～60cmで40cm程度が多い。覆土中からの遺物の出土は全体としては少ないが、B4-1グリッドからまとまって出土している。図示した遺物もそのほとんどが同グリッド出土の土器である。

遺物は、古墳時代前期の遺物とそのほとんどである。器種は高坏、壺、小型壺、小型鉢、台付甕、甕



第35図 村上宮内遺跡b地点遺構検出状況図



第36図 村上宮内遺跡b地点出土遺物(1)

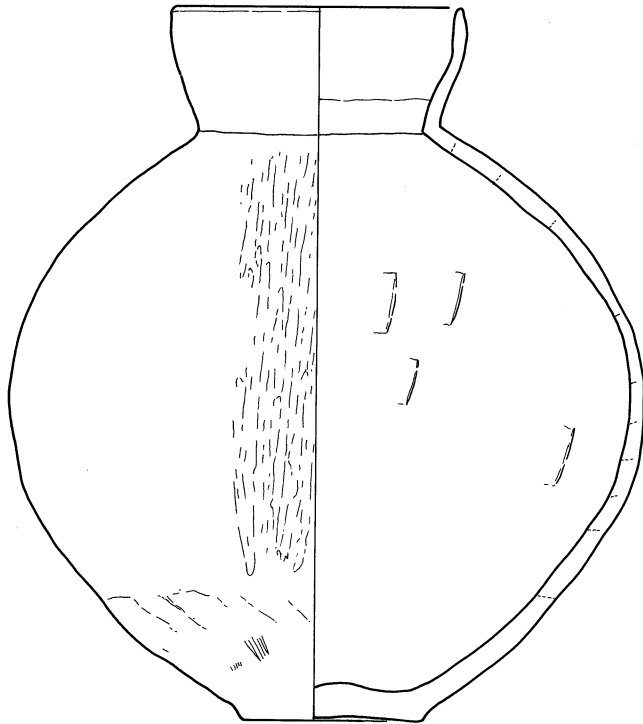
が出土している。甕は刷毛目を有する，刷毛目を磨り消す，ヘラなどで調整するもの3種が混在している。無台の甕の内，小型のものは刷毛目を施す例が多い。また，客体的にボタン状や棒状の浮文，結節文を施した壺等が見られる。

調査のまとめ

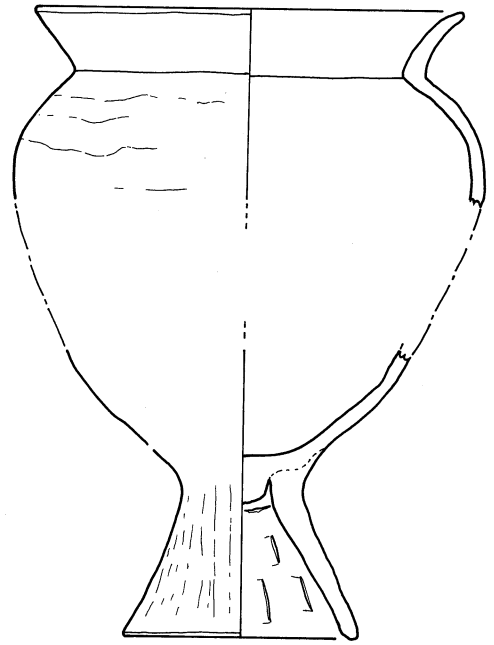
今回の調査において，本地区を含む周辺が古墳時代前期中葉の集落であることがわかった。ただ，台地縁辺部から200m以上離れたこの平坦部に，これだけの遺構が展開していることは興味深い。ここが集落の主体なのか，台地縁辺部に向かって更に遺構密度が高くなるのか今後の成果に待ちたい。

参考文献

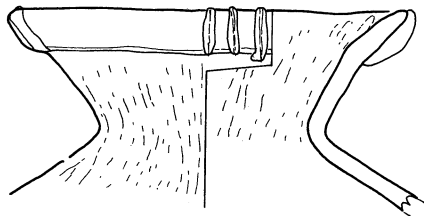
八千代市教育委員会「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集」(1987年3月)



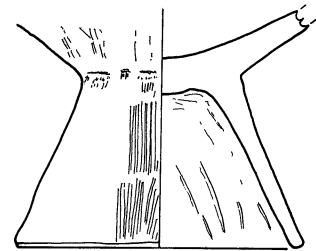
壺 口径 11.1cm
 底径 7.0cm
 器高 28.5cm
 胴部 25.0cm
 外面 頸部～胴部下位ヘラミガキ
 胴部下位ハケ目後ナデ
 内面 ヘラナデ



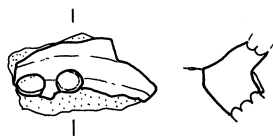
台付甕 口径 16.6cm
 胴部径 18.5cm
 脚部径 9.2cm
 推定器高 25.0cm
 外面 口辺部横ナデ胴部ヘラナデ
 内面 胴部ナデ脚部ヘラナデ



壺 口径 15.6cm
 遺存高 7.9cm
 内外面 ヘラミガキ
 3本単位の棒状浮文か4カ所見られる。



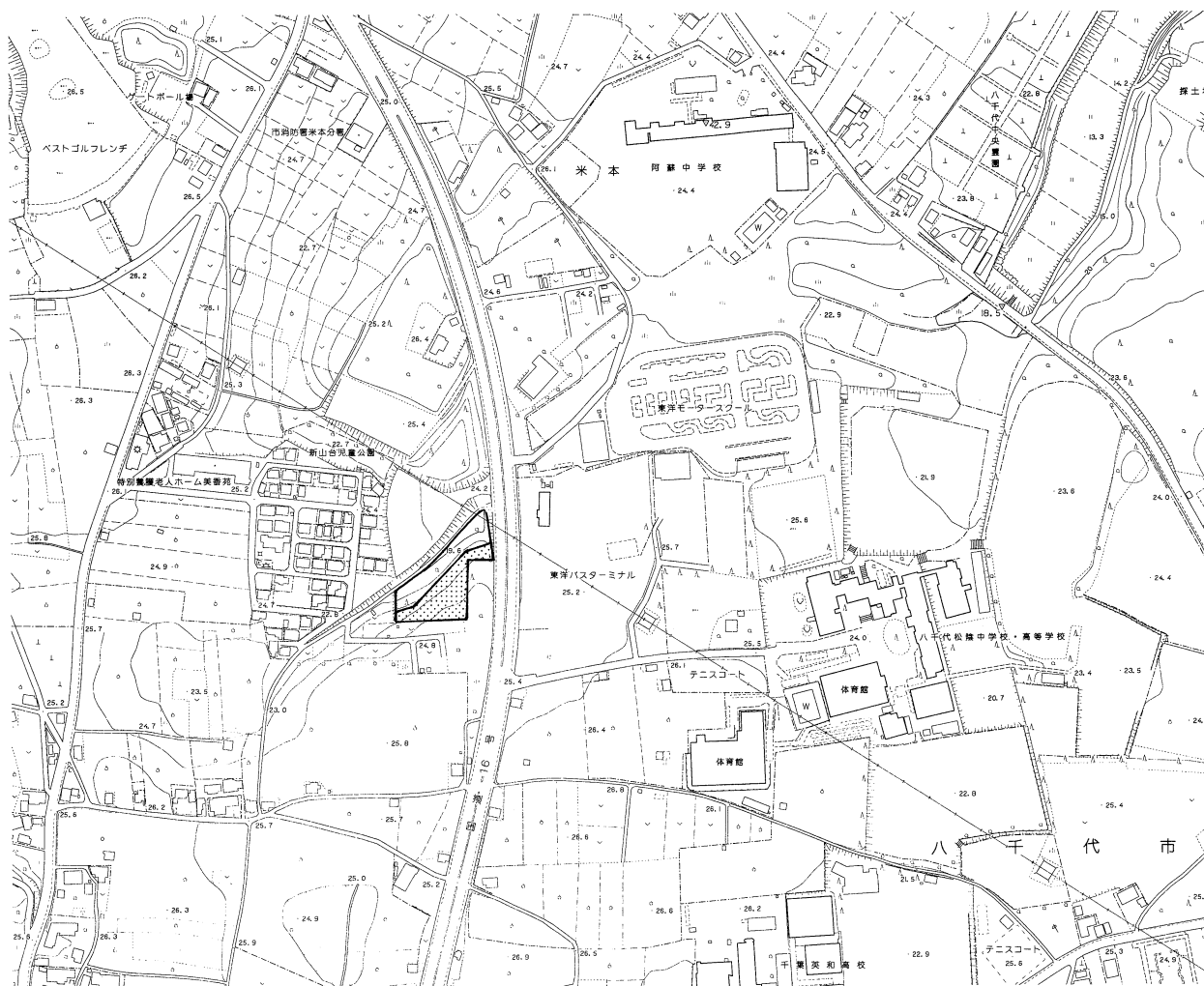
台付甕 脚部径 11.5cm
 遺存高 9.5cm
 外面 胴部ハケ目後ナデ
 脚部ハケ目
 内面 ヘラナデ



0 5cm
 (S=1:3)

第37図 村上宮内遺跡b地点出土遺物(2)

8. 村上新山西遺跡



第38図 村上新山西遺跡位置図 (S=1:6,000)

遺跡の立地と概要

村上新山西遺跡は、市域の中央やや東寄りに位置する。市域の東端である佐倉市との市境は、印旛沼に流れ込む井野川・小竹川の低地がほぼ南北に走っている。この低地から西に入り込む森下谷津の奥部の支谷を北西に臨む台地上に、本遺跡は立地している。今回の調査対象地は台地上縁辺に当たる、斜面から平坦面にかけての標高22~24mの地点である。現況は山林であるため、地表面観察による遺物発見は不可能であった。また隣接する畑地でも遺物は確認されなかった。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、幅2mのトレンチを任意に11箇所、約205m²分設定し掘削した。

調査期間は平成12年12月25日~28日である。25日トレンチ設定、一部掘削、26日~27日重機表土剥ぎ及び遺構検出作業、27日~28日遺構検出作業及び土層調査、28日図面作成及び器材撤収を行った。

調査の概要

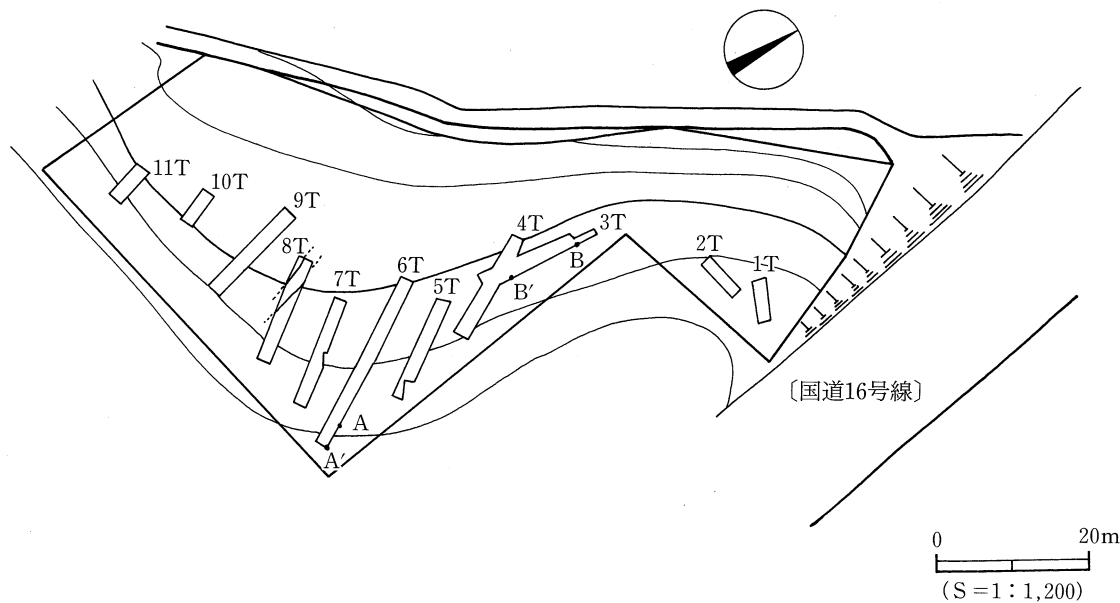
平坦面から斜面上部にかけては、ローム層までの深さ0.3~0.5mであった。斜面下部に当たる3Tでは、谷の土層堆積の様相を帯び、ローム層までの深さ約1mで、黒褐色土などの堆積が確認された。

遺構は8Tで検出された溝1条のみである。地表には溝の痕跡が無く、地境などと一致しないが、形態は根切り溝状で、覆土はロームまじりの柔らかい褐色土であることから、近現代のものと判断した。

遺物は、全く確認されなかった。

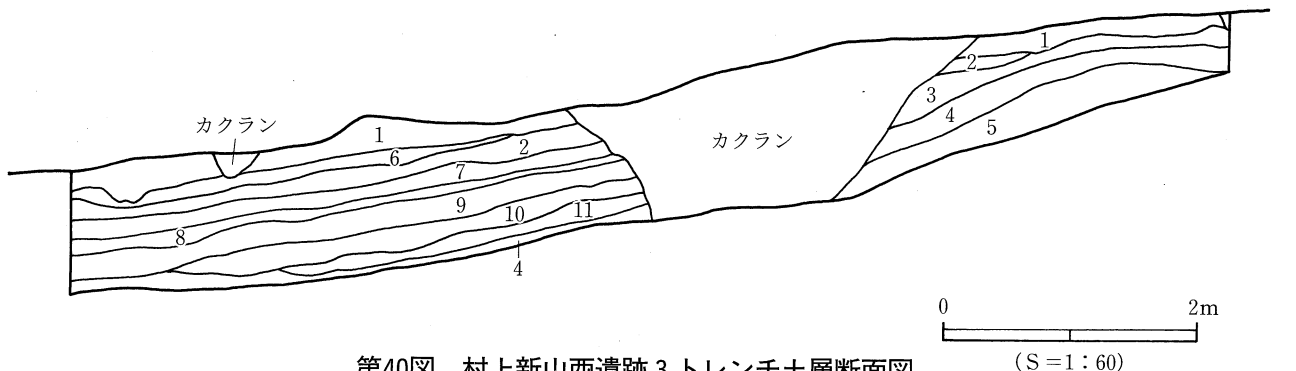
調査のまとめ

遺構は溝1条のみ、遺物は無しという希薄な状況を確認した。



第39図 村上新山西遺跡遺構検出状況図

B・— 22.300m

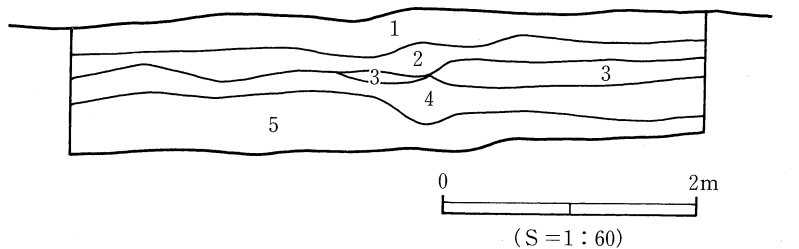


第40図 村上新山西遺跡3トレンチ土層断面図

土層説明

- | | |
|---|----------------------------|
| 1. 暗褐色土 7.5YR 3/4+4/3 テフラ相当。暗褐色土に褐色土が斑状に入る。 | 7. 暗褐色土 7.5YR 3/3 硬質。光沢あり。 |
| 2. 褐色土 7.5YR 4/3 | 8. 暗褐色土と黒褐色土 7.5YR 3/3+3/2 |
| 3. 褐色土 7.5YR 4/3 下層のソフトローム斑らに入る。 | 9. 黒褐色土 7.5YR 3/2 |
| 4. 褐色土 ソフトローム。 | 10. 黒褐色土 7.5YR 3/1 漆黒色 |
| 5. にぶい褐色土 7.5YR 5/4 白っぽい粘土。 | 11. 黒褐色土と褐色土 7.5YR 3/2+4/4 |
| 6. 暗褐色土 7.5YR 3/4 軟質。 | |

A・— 25.500m



第41図 村上新山西遺跡6トレンチ土層断面図

6トレンチ土層説明

1. 暗褐色土 7.5YR 3/3 表土。グズグズに弱い。枯葉、根含む。
2. 暗褐色土 7.5YR 3/4 1よりしまっている。
3. 暗褐色土 7.5YR 3/3
4. 暗褐色土～褐色土 7.5YR 3.5/3 5層との色調の差は明瞭で漸移していない。
5. 褐色土 7.5YR 4/4 ソフトローム層。

9. 向山遺跡b地点

遺跡の立地と概要

市域中央を貫流する萱田地区の新川に至る谷津の奥部に位置する。台地上平坦部で標高約24mである。現在までに2地点の調査が実施されている。昭和56年に八千代市遺跡調査会が行った調査では、縄文時代の土坑が検出され、遺物は先土器時代の石器・縄文土器が出土している。また、平成元年～2年に(財)千葉県文化財センターが実施した調査では、旧石器時代の石器、剥片・縄文時代前期、中期の土器片が出土している。

調査の方法と経過

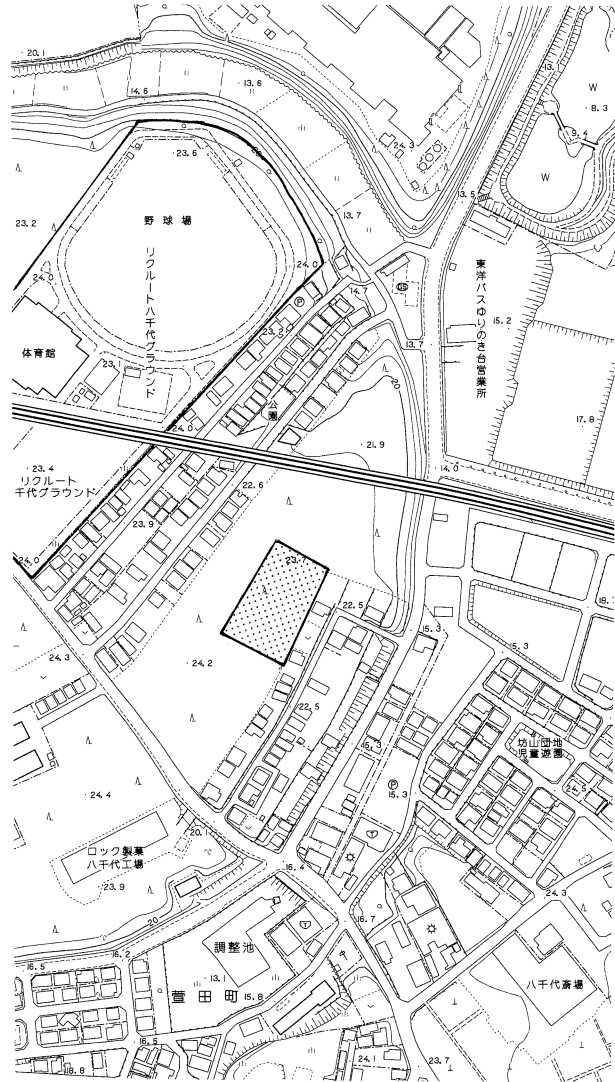
調査は伐採終了後、調査区の形状に沿って10m間隔に2×5mのトレンチを設定し、適宜その間にトレンチを設け遺構確認を行った。また一部において拡張して遺構の性格を把握することに努めた。

調査期間は平成12年12月15日～12月25日で、12月15日～18日トレンチ設定及び包含層把握のための手掘り、19日～20日重機によるトレンチ表土除去、20日～21日人力によるトレンチ内遺構確認作業、21日～22日実測・下層調査、25日器材撤収・埋め戻し作業を実施し、調査を終了した。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、I表土、II黒色土、III暗褐色土、IVソフトロームとなっている。

調査の結果、時期不明のピット1基を検出した。プランは略円形で42cm×46cm、深さ13cmの規模をもつ。底面は平らな部分はなく緩やかに立ち上がっている。覆土は1層で、暗褐色土で粘性弱く、締まっている。出土遺物はない。また、良好な基本層序を示していたにも係わらず包含層は検出されなかった。縄文時代中期の土器片が1点出土したのみであった。下層調査においては、(財)千葉県文化財センターが近接地区で調査した成果を踏まえて、IV～V層を目安に掘り下げたが遺物の出土はなかった。



第42図 向山遺跡b地点位置図 (S=1:5,000)

調査のまとめ

今回の調査においては、時期不明のピット1基が検出されたのみであった。縄文時代、先土器時代、旧石器時代の遺構・遺物はほとんど検出されなかった。

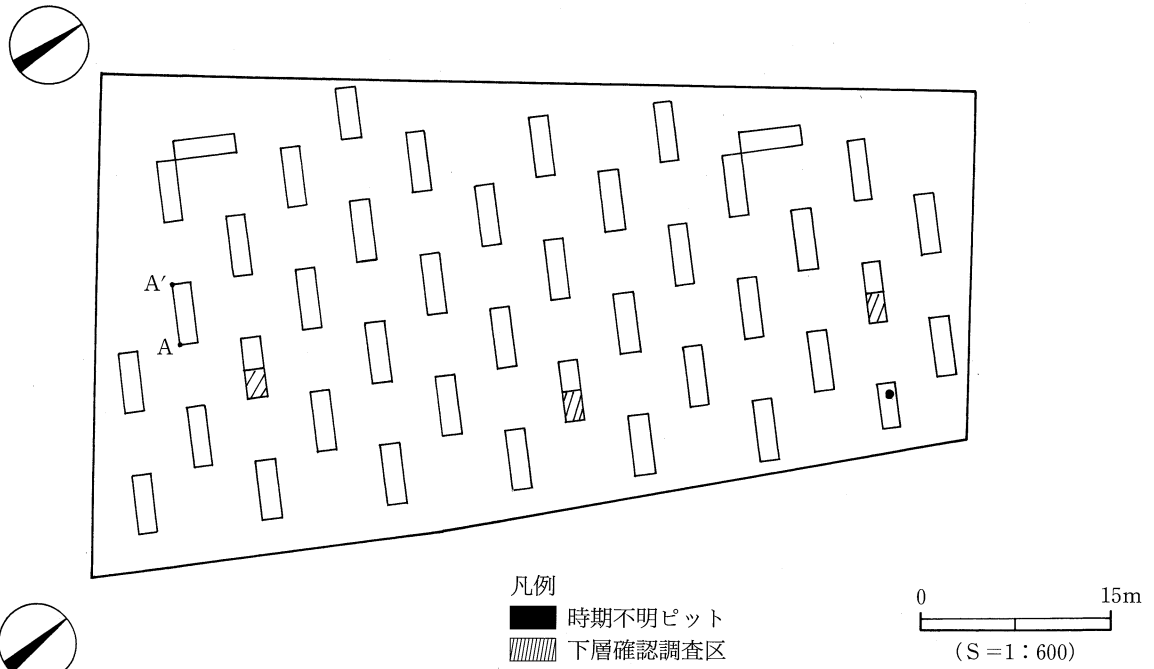
向山遺跡のいままでの成果を踏まえてみると、台地縁辺部において縄文時代前期・中期の遺構、遺物が検出されるが、台地のやや奥に入ると、先土器時代以前の遺構・遺物のみの分布になっている。このようにみると、向山遺跡は旧石器時代、縄文時代に限定された遺跡として考えられる。

参考文献

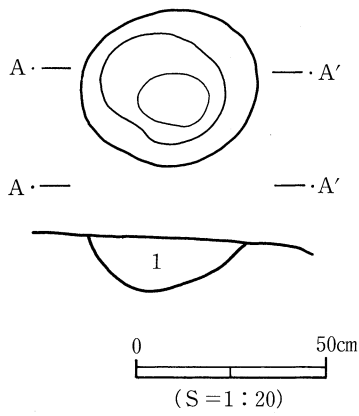
八千代市史編さん委員会 「八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世」 1990

(財)千葉県文化財センター「八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他」

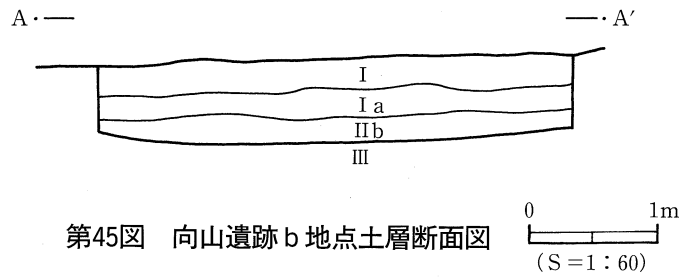
——東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書——1994



第43図 向山遺跡b地点遺構検出状況図



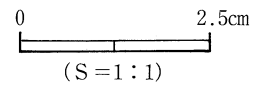
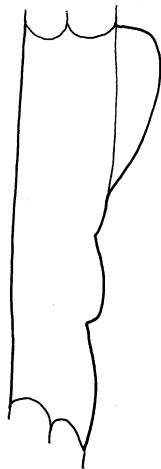
第44図 向山遺跡b地点01P遺構実測図



第45図 向山遺跡b地点土層断面図

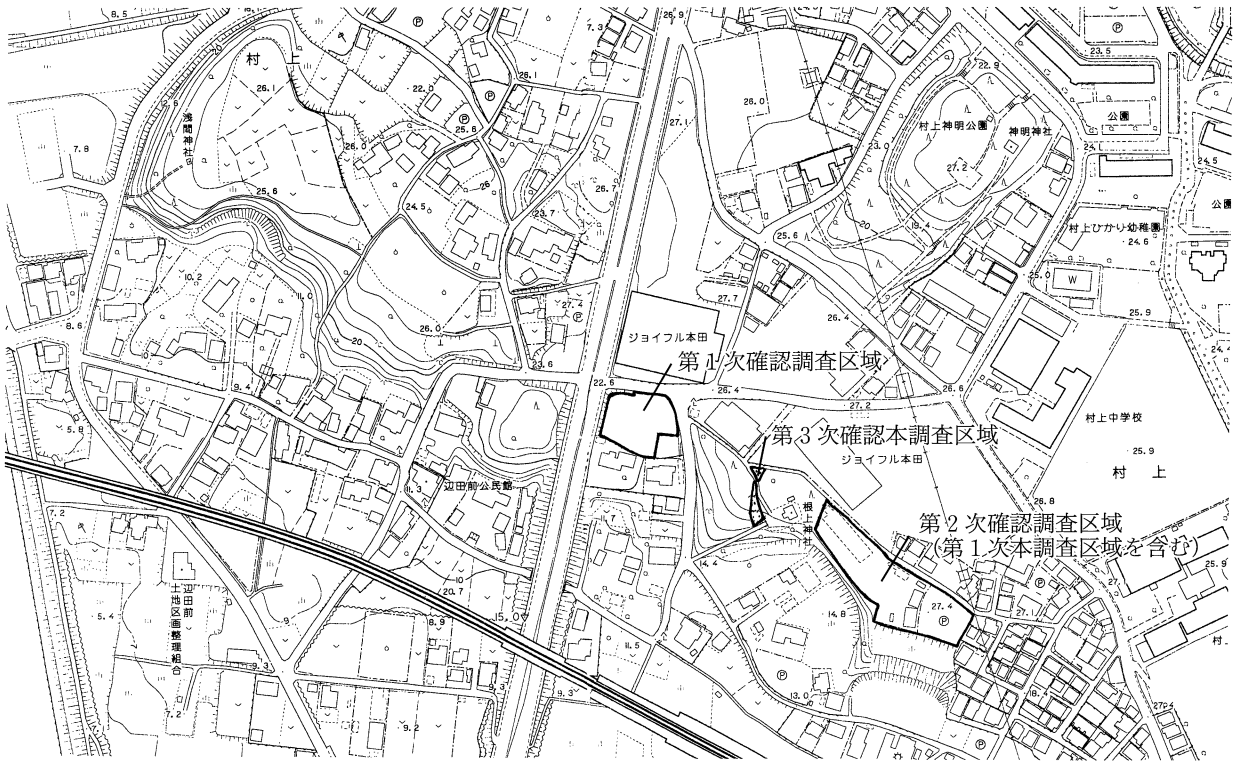
土層説明 (01P, 基本層序)

- I. 暗褐色土 ローム粒, 黒色土粒混入。ややしまっている。粘性やや弱い。
- I. 暗褐色土 表土層。
- Ia. 黒褐色土 腐食土層。粒子細かく, しまる。
- IIb. 暗茶褐色土 新期テフラ層下の腐食土層。ややぼそぼそする。
- III. 暗黄褐色土 ソフトローム層。



第46図 向山遺跡b地点出土遺物

10. 白筋遺跡（第3次確認本調査）



第47図 白筋遺跡位置図（S=1：5,000）

遺跡の立地と概要

白筋遺跡は、市域の南部、新川の東岸に広がる入り江状の辺田前・沖塚前低地を南に臨む台地上に立地する。区域内には前方後円墳である根上神社古墳が所在する。

本遺跡におけるこれまでの調査は、いずれも八千代市辺田前土地区画整理事業に伴って八千代市遺跡調査会が実施している。平成6年度に第1次確認調査が遺跡西端部で行われ、遺構は検出されなかったが、縄文時代早期井草式土器片や古墳時代の手捏土器・土玉・土師器片などが出土した。平成10年度には第2次確認調査が根上神社古墳の南東一帯を対象として行われ、平安時代初期の住居跡1軒と根上神社古墳の周溝の一部等を確認し、それらを対象として第1次本調査が行われた。

今回の調査区域は、根上神社古墳の北西部の墳麓に当たる部分と、古墳の西方に当たる台地の縁辺部で、標高26～27mのところである。根上神社古墳は市内最大の前方後円墳で、市の指定文化財（史跡、昭和53年11月指定）である。指定範囲は神社境内であり、古墳の範囲とは必ずしも合致していない。このため、今回の調査区域の墳麓部は指定範囲外であるが、周溝の検出が期待された。平成10年度の調査で周溝の一部が検出されたのも同じ事情によるものである。

調査の方法と経過

調査区の地形と形状に合わせて、トレンチを任意に7箇所設定し、それぞれを1T～7Tとした。約94㎡を掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。調査期間は、平成13年1月18日～25日である。調査経過は、18日に器材搬入、トレンチ設定及び一部掘削、19日重機表土剥ぎ作業と清掃検出作業、22日清掃検出作業と遺構掘削作業、23日～24日遺構調査と土層調査、25日地形測量と器材撤収で調査を終了した。埋め戻しは30日に行った。

調査の概要

墳麓部に当たる1T・2T・3Tで、予想どおり古墳周溝を検出した。いずれも周溝の立ち上がりは外側を確認したのみである。周溝の確認面は地表下20cm前後と浅かった。

第52図に2T南西壁の土層を示した。トレンチの南東コーナーから約2.26mのところ17cmの段差が認められ、これを立ち上がりと判断した。段差の上の標高27.09m、下は26.92mである。しかし、ここよりも1m外側付近から傾斜が認められるので、より広がる可能性がある。底面の標高は26.92mである。特筆すべきことは、トレンチの南東コーナーから検出された土坑である。トレンチ内に現れた部分のみを掘削した。土層断面観察によると土坑の付近では周溝底面が若干盛り上がる。土坑の覆土は、上層がロームブロックを含む褐色土と暗褐色土の混じり合った土、下層が黒褐色土と暗褐色土主体の土である。上層は埋め戻し土と考えられる。幅は90cm以上、溝底からの深さは最深部50cm。位置的には古墳のコーナーに当たり、周溝内主体部の可能性がある。土坑内からは遺物は出土しなかった。トレンチ全体では、周溝覆土から磨滅した土器小片が、底面から炭化材の破片が出土した。

第53図に1T南西壁の土層を示した。トレンチの南東コーナーから約2.85～2.90mのところのソフトロームに10cmの段差が認められ、これを立ち上がりと判断した。段差の上の標高が27.4m、下が27.3mである。そこから内側へ向かって緩やかに下ってゆき、部分的に窪むところもあるが、標高26.95～26.90m付近で底面となる。底面の深さは地表面から測っても37～53cmと浅い。覆土は厚さ30cm前後で、上層が暗褐色土、下層が褐色土、底面直上はローム混じりの褐色土である。暗褐色土層中から土師器の底部破片が出土した(第49図1)。外面はほとんど剥落しているが横方向の削りが見え、内面は横ナデでクロク特有の凹凸がある。底面外面に沈線状の窪みが4条見える。胎土には雲母片を含み焼成良好である。平安時代の甕と判断されるので、古墳築造の時期のものではないと思われる。

3Tの周溝は、丁度コーナー付近に当たる。立ち上がりは比較的明瞭で、上面の標高が27.04m、底面は26.90～26.93mで、深さは14cm前後である。

台地の縁辺部の4Tでは、ピット1基を検出・調査した。平面形は長軸60cm、短軸37cmの楕円形で、深さ45cmである。遺物は無く、時期の決定は困難であるが、根上神社古墳に近いということから古墳時代に属するものと判断した。6Tでは、掌大の片岩が1点出土した。

今回の調査の出土遺物は、前述した土器片2点、片岩1点、炭化材片1点のみである。第49図2は神社境内の社殿南方で表面採集した須恵器片である。外面は叩き目、内面はナデが施される。

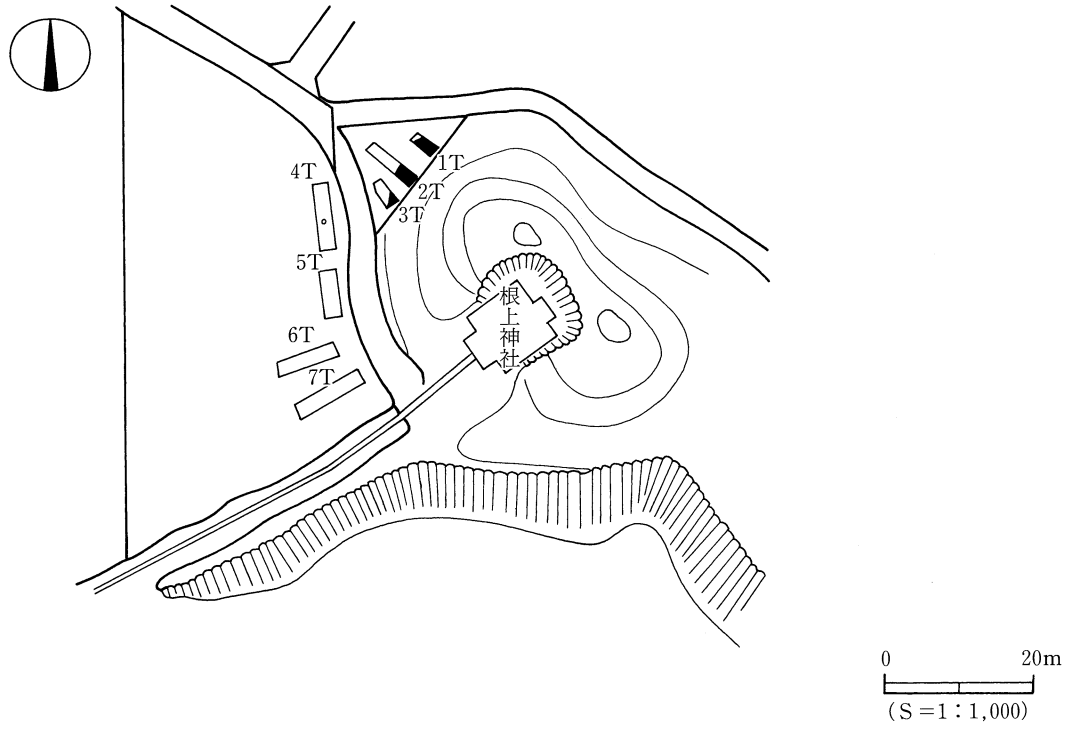
根上神社古墳について —まとめにかえて—

今回の調査で古墳北西部の、平成10年度の調査で南東部のそれぞれ周溝外側が検出され、古墳長軸方向の周溝外側間の長さが約50mとわかった。周溝の幅について考えると、北西部における内側の立ち上がりは調査範囲外であるが、それは地形観察により微妙な段差として認識できる。そこから推測して、3～4m規模になるものと考えられる。北西部での周溝の深さは検出面から10～30cmと浅い。台地縁辺部に作り出された古墳なので、斜面側では周溝が相対的に浅くなるのであろう。

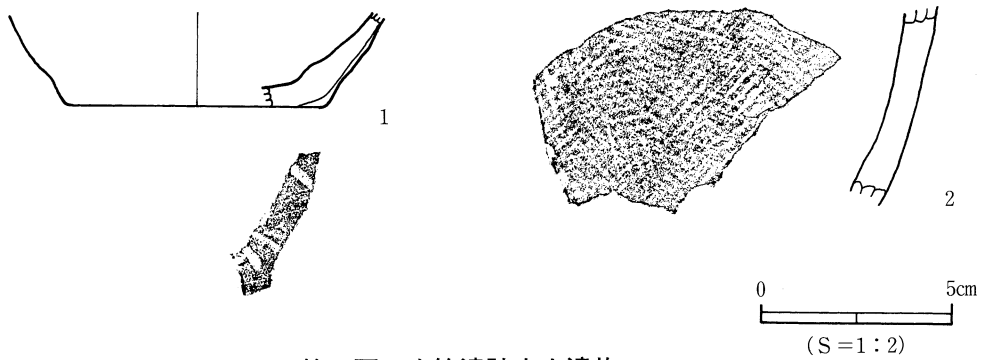
過去2度の調査では築造時期を示すような遺物は得られていない。他にも本古墳の出土品は全く伝わっていないため、敢えて第49図2に表面採集の須恵器片を示した。主体部についても不明で、まだ謎の多い古墳であるが、今回2Tから周溝内主体部と考えられる土坑が検出されたことは意義深い。

なお、古墳の一部を削って根上神社が鎮座しているが、この神社は大己貴尊を祀り、現在も地元住民に信仰されている。現在の社殿が造営されたのは昭和50年12月である。その前は同じ位置に「お堂」のような建物があり、堂内の床は土間で囲炉裏があり筵を敷いていたという。大正14年3月に屋根を改造しているが、それ以前は茅葺きであったという(前神明神社宮司の山本禮典氏のご教示による)。

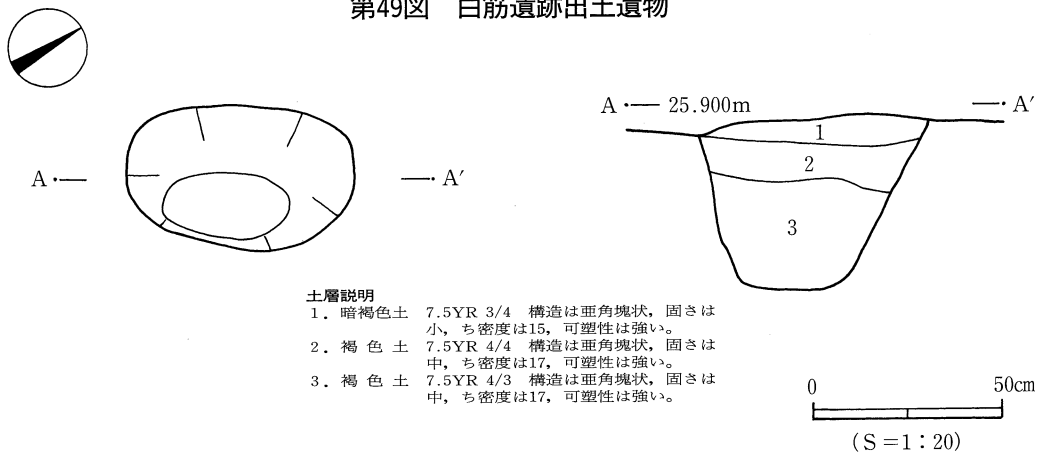
今回周溝が検出された区域については現状保存し、将来的には南東部の周溝も含めて指定範囲に追加するよう検討している。



第48図 白筋遺跡(第3次)遺構検出状況図



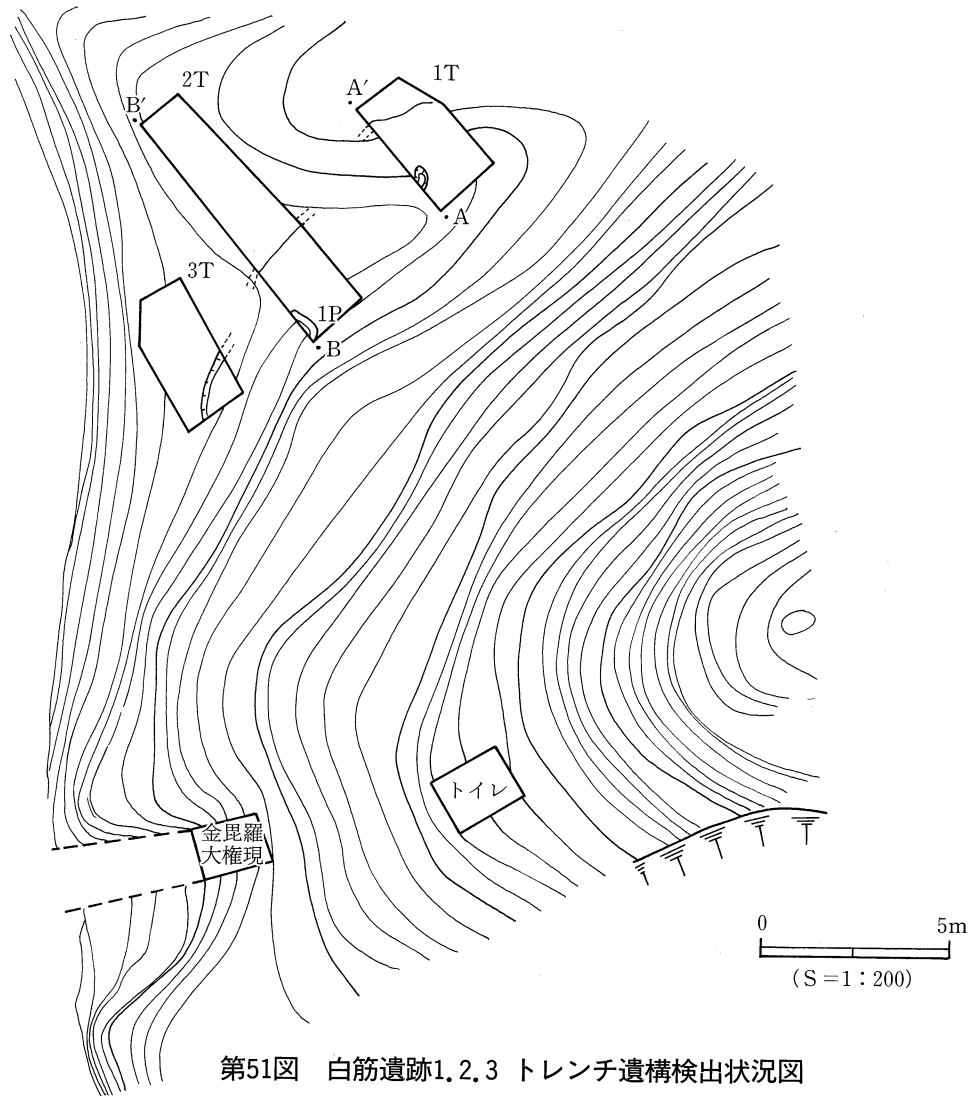
第49図 白筋遺跡出土遺物



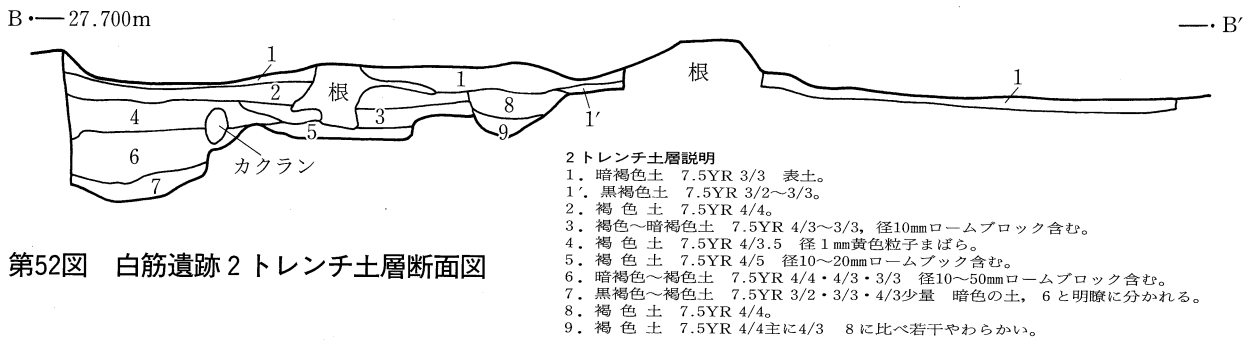
土層説明

1. 暗褐色土 7.5YR 3/4 構造は歪角塊状、固さは小、ち密度は15、可塑性は強い。
2. 褐色土 7.5YR 4/4 構造は歪角塊状、固さは中、ち密度は17、可塑性は強い。
3. 褐色土 7.5YR 4/3 構造は歪角塊状、固さは中、ち密度は17、可塑性は強い。

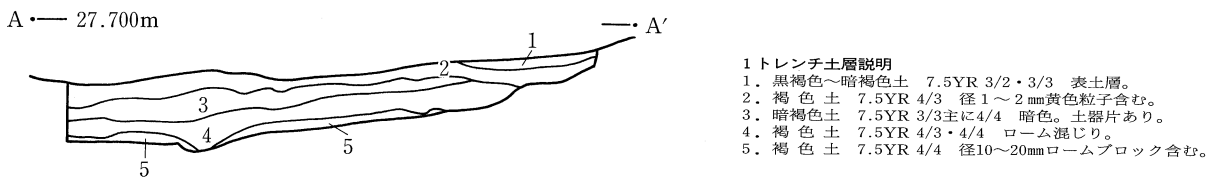
第50図 白筋遺跡 2 P 遺構実測図



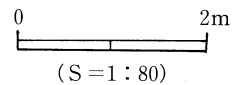
第51図 白筋遺跡1.2.3 トレンチ遺構検出状況図



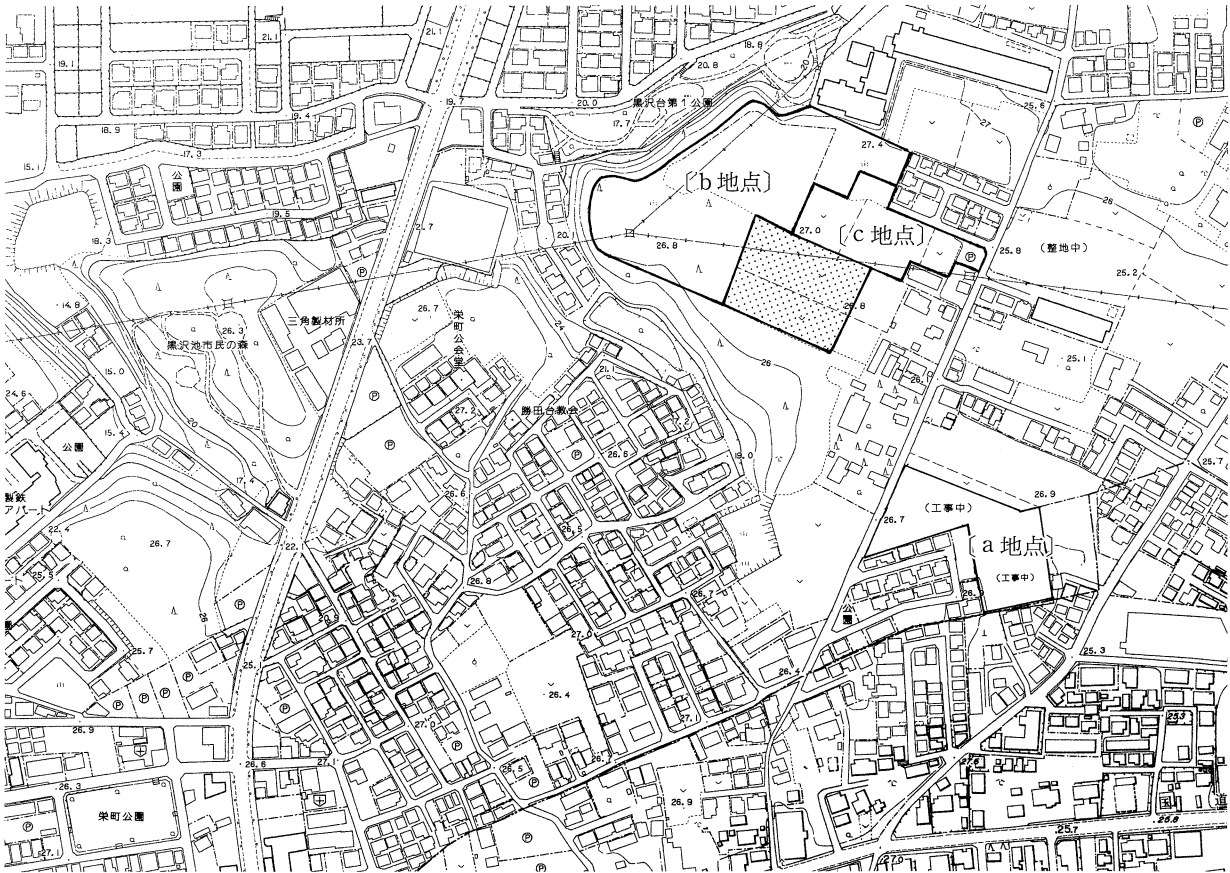
第52図 白筋遺跡2 トレンチ土層断面図



第53図 白筋遺跡1 トレンチ土層断面図



11. 新林遺跡 d 地点（第 1 次確認調査）



第54図 新林遺跡 d 地点位置図 (S = 1 : 5,000)

遺跡の立地と概要

新林遺跡は、市域の南部、新川の東岸にある辺田前低地から東に延びる谷の南側台地上に立地する遺跡の一つである。これまでの調査では、a 地点で落とし穴列が、b 地点で縄文時代の土坑 1 基と縄文時代前期～後期の土器片が、c 地点で縄文時代中期の住居跡・遺物がそれぞれ検出されている。今回の調査区域は、b 地点と c 地点に接する標高 27m の畑地である。概ね平坦であるが南～南西に向かって若干低くなっている。c 地点の中期集落が、この地点にも展開するのではないかと予想されたが、表面採集では遺物散布の密度はやや疎であり、土器片は縄文時代前期後半浮島式土器が中心であった。

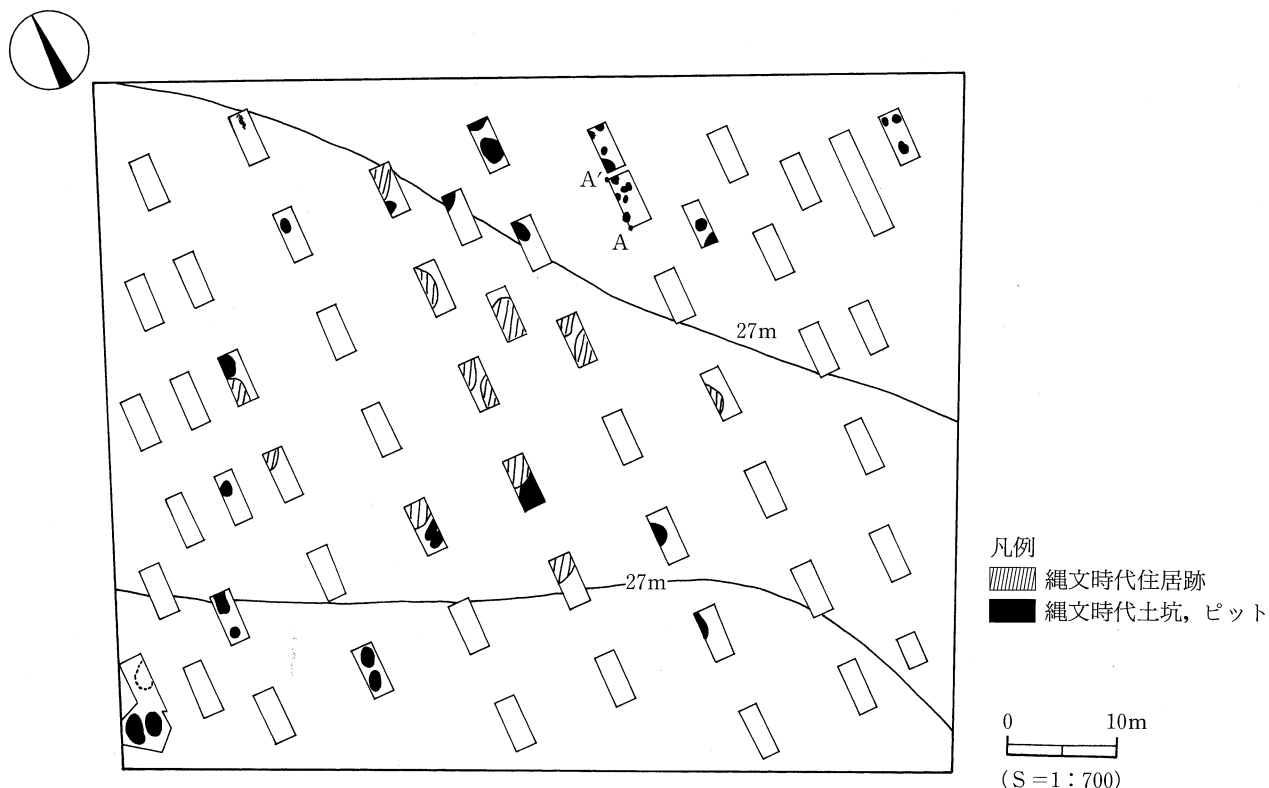
調査の方法と経過

調査区内に 20m ごとに設置された方眼杭を基に、東西 2 m × 南北 5 m のトレンチを原則として 10m 間隔で設定した。必要に応じて拡張を行って約 530m² を掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成 13 年 2 月 15 日～28 日である。調査経過は、15 日に器材搬入、15 日～16 日 トレンチ設定及び一部掘削、19 日～20 日 重機表土剥ぎ作業と清掃検出作業、21 日 清掃検出作業と土層調査、22 日～28 日 清掃検出作業、27 日～28 日 土層調査、遺物取り上げ、平面図作成と器材撤収で調査を終了した。本調査対象外の区域の埋め戻しを 3 月 7 日に行った。

調査の概要

比較的良好な土層の堆積を確認できた。第 56 図に調査区中央やや北東寄りの C5-21-1 G 西壁の土層を示した。II-2 層とした暗褐色土に褐色土が斑点状に混じる土を掘り込んで遺構が作られており、他のト



第55図 新林遺跡 d 地点遺構検出状況図

レンチにおいても同様と判断した。

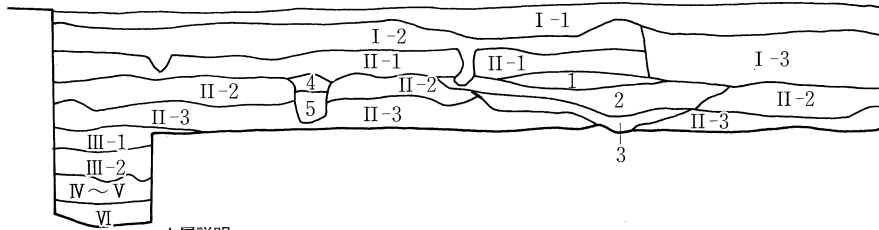
遺物の総量は660点で、うち縄文土器及び土製品が608点で92%以上を占め、縄文時代の石器・剥片が3点、近世の泥面子5点、かわらけ2点、近・現代陶磁器が10点、石12点等である。遺物の主体である縄文土器・土製品608点のうち98%以上を占める約600点が縄文時代前期後半のものであった。これ以外には早期撚糸土器(井草Ⅰ式)、前期繊維土器、中期五領ヶ台式土器・加曾利E式土器などが散見された。縄文土器は、遺構覆土の上層やさらにその上のⅡ-1層において出土することを確認した。

遺構は、調査区のほぼ中央部を中心に検出し、住居跡13軒、土坑3基、ピット31基と判断した(第55図)。遺物のあり方等から、これらの遺構はすべて縄文時代前期後半に属するものと判断した。

第57図に主な遺物を図示した。比較的目立つ文様は波状貝殻文で、特に放射肋のない貝殻を使ったもの(第57図1~4)が約50点認められた。放射肋のある貝殻を使ったもの(同図5)は少なく約10点程度であった。これらは浮島式に属するものが多いと思われるが、2は興津式に下るものかもしれない。輪積痕を残す6は浮島式、7は変形爪形文、8は三角文で、浮島Ⅲ式に属する。沈線文がつけられた9・10は、輪積痕が無く、興津式に属する。11・12はともにRL縄文がつけられており、特に12の口唇には鋸歯状粘土紐が貼付されており、興津式である。また18・19は浮線文で諸磯b式、20は集合条線文と瘤文で諸磯c式である。22は中期初頭の五領ヶ台式土器である。29は土製塊状耳飾りの欠損品。30も同様であろうか。28は割れ口に擦った痕跡がある。31はまるで有舌尖頭器のような形の土製品である。32は磨石の欠損品、33はチャート製の石鏃である。34・35は近世の泥面子である。

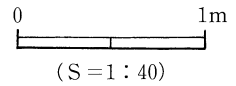
まとめ

新林遺跡 d 地点は、縄文時代前期後半浮島式~興津式の遺跡であることが確認された。この時期の集落跡の検出が期待できる。この地点から小谷を隔てた北北東約200mに所在した二重堀遺跡 a 地点、西約200mの黒沢池上遺跡、西約600mの沖塚遺跡も同様の時期が中心である。なお、確認調査の結果を見る限り、隣接する c 地点の縄文時代中期集落の展開は、d 地点には及ばないようである。

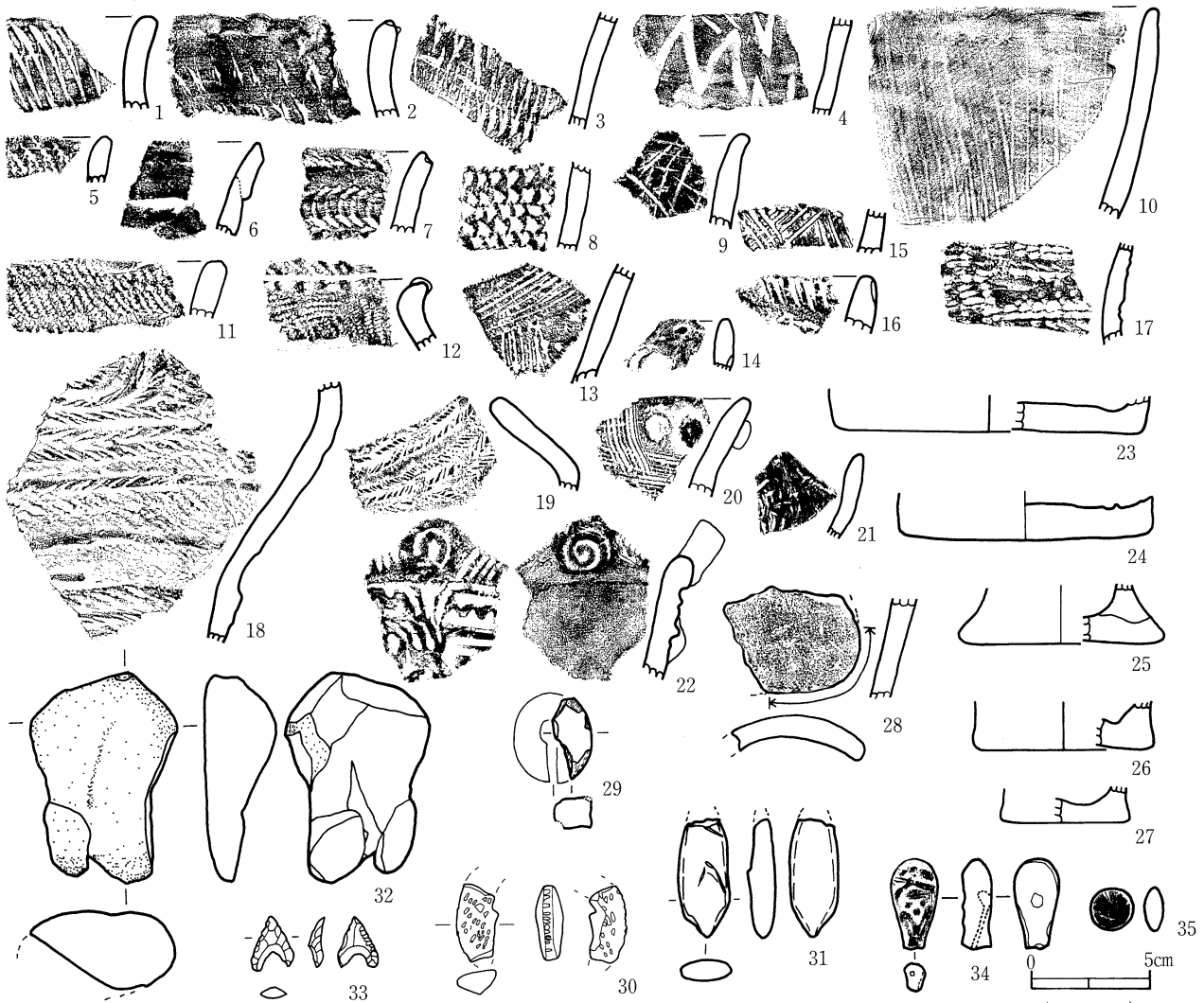


土層説明

- I-1, 黒褐色土 7.5YR 3/2 耕作土。しまり弱い。
- I-2, 黒褐色土 7.5YR 3/2 I-1よりしまる。焼土粒, 炭化物含む。
- I-3, 耕作土
- II-1, 褐色土 7.5YR 4/3+4/4斑状 テフラ層。
- II-2, 暗褐色~褐色土 7.5YR 3/3主4/3斑状 遺構が掘りこまれる層。
- II-3, 褐色土 7.5YR 4/3 ソフトローム漸移層。
- III-1, 褐色土 7.5YR 4/4 ソフトローム層。
- III-2, 褐色土 7.5YR 4/4 ソフトローム。
- IV~V, 褐色土 7.5YR 4/5 ハードローム層。III-1よりしまり弱くもろい。
- VI, 明褐色土 7.5YR 5/6 AT層。火山ガラス含む。黒色スコリア多。赤褐色スコリア含む。
- 1, 黒褐色~暗褐色土 7.5YR 3/2+3/3斑状。
- 2, 黒褐色土 7.5YR 3/2 もっともはっきりした覆土。
- 3, 暗褐色~褐色土 7.5YR 3/3+4/3, 4/4雲状 II-2に似る。
- 4, 黒褐色~暗褐色土 7.5YR 3/2主3/3斑状 炭化物片, 焼土粒含む。
- 5, 暗褐色~褐色土 7.5YR 3/3主4/4雲状 炭化物片含む。



第56図 新林遺跡d地点土層断面図



(S=1:3)
30・33は1:2

第57図 新林遺跡d地点出土遺物

12. 下高野新山遺跡(第4次確認調査)

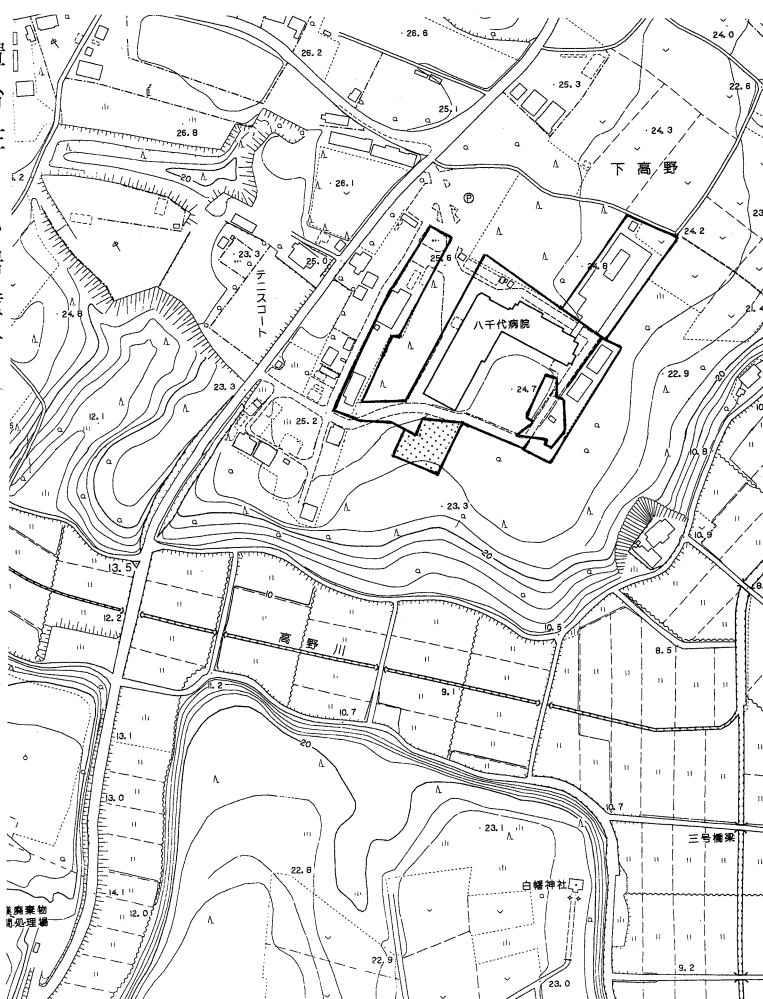
遺跡の立地と概要

下高野新山遺跡は市域北東部に位置し、高野川北岸を臨む標高約24mの台地上平坦部～縁辺部に所在する。現在までに病院施設の増設を目的として、3回にわたり発掘調査を実施している。その結果縄文時代早期後半の竪穴住居跡、炉穴、ピットを中心として、古墳時代の竪穴住居跡3軒、古墳1基、方形周溝墓1基を検出している。

調査の方法と経過

現況は下草繁茂、未伐採の植林だったので、下草刈り後植林の間に沿って2m×任意の長さでトレンチを設定した。またそれ以外については調査区の形状に沿ってトレンチを設定し、遺構確認をおこなった。

調査期間は平成13年3月19日～26日である。3月19日調査区内下草刈り、21日トレンチ設定作業・手掘りによる包含層調査、22～23日重機によるトレンチ表土剥ぎ作業と並行してトレンチ内遺構確認作業、遺構確認状況写真撮影、図面作成、遺物取り上げ、26日遺物洗浄、器材撤収により調査を終了した。



第58図 下高野新山遺跡位置図 (S=1:5,000)

調査の概要

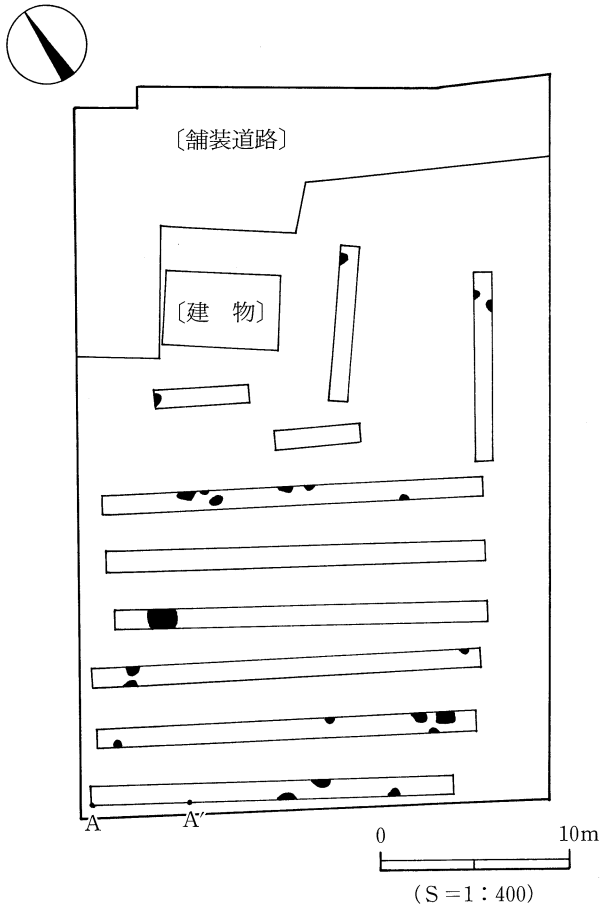
本遺跡の基本層序は、I表土、II黒色土、III暗褐色土、IVソフトロームとなっている。深さは55～60cmである。遺物包含層はII層下部～III層中である。

調査の結果、縄文時代早期のピット22基を検出した。プラン及び規模は円形で50cm程度である。覆土は全般に暗褐色土で焼土粒を混入している。分布は調査区全体に広がっているが中央では薄い。遺構確認面はIII層中で行ったが、不確定な部分はIV層まで人力で下げて確定した。

遺物は全体で55点出土している。時代は、縄文時代早期後半の貝殻条痕文系(広義茅山式)の土器がほとんどで中期(阿玉台式)の土器が数点出土している。石器は磨石の小片が2点出土している。遺物は遺構が確認されている所からの出土が多い。

調査のまとめ

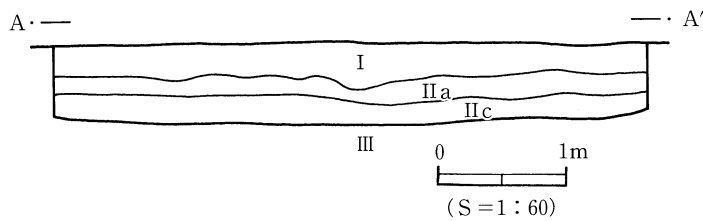
今回の調査において、台地縁辺部に近い本調査区の遺構・遺物の分布状態がやや薄いことがわかった。より標高の高い位置に占地したことがうかがえる。詳細は今後調査事例の増えた段階に明らかになっていくことになるだろう。



第59図 下高野新山遺跡遺構検出状況図



第60図 下高野新山遺跡出土遺物



第61図 下高野新山遺跡土層断面図

土層説明

- I. 暗褐色土 表土。根等によるカクランあり。
- Ia 黒褐色土 腐食土。粒子細かくしまっている。
- IIc. 暗茶褐色土 新期テフラ層下の腐食土層。遺物包含層。
- III. 暗黄褐色土 ソフトローム層。

参考文献

- 八千代市教育委員会「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集」(1987年3月)
- 八千代市教育委員会「千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告」昭和63年度(1989年3月)
- 八千代市教育委員会「千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告」平成元年度(1990年3月)
- 八千代市教育委員会「平成6年度版八千代市埋蔵文化財調査年報」(1996年3月)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよししないいせきはくつちょうさほうこくしょ へいせい13ねんど							
書名	千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度							
編著者名	宮澤久史 森竜哉 秋山利光 常松成人							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047(483)1151							
発行年月日	西暦 2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北裏畑遺跡	八千代市萱田町 字萱田町824-2ほか	12221	242	35度 43分 00秒	140度 6分 32秒	20000420 ～ 20000428	115/710	共同住宅 建設
雷遺跡 b地点	八千代市米本 2476ほか	12221	106	35度 35分 18秒	140度 7分 39秒	20000424 ～ 20000511	454/3,648.77	病院増設
浅間内遺跡	八千代市村上 字浅間内2807-1ほか	12221	204	35度 43分 27秒	140度 7分 05秒	20000530 ～ 20000621	上層94/1,054 下層5/98 本調査98	土地区画 整理
上谷津台南遺跡 d地点	八千代市上高野 字上谷津台1049-1ほか	12221	229	35度 43分 17秒	140度 8分 36秒	20000621 ～ 20000705	224/1,527	盛土工事
高津新田野馬掘遺跡 i地点	八千代市八千代台西 9丁目45-1ほか	12221	251	35度 41分 30秒	140度 5分 09秒	20000822 ～ 20000912	36/208	宅地造成
菱丸遺跡 d地点	八千代市菱丸 字高野堀込1180-1	12221	151	35度 44分 32秒	140度 6分 16秒	20000929 ～ 20001010	75/700	資材置場
村上宮内遺跡 b地点	八千代市村上 字宮山835-1ほか	12221	191	35度 44分 04秒	140度 7分 17秒	20001026 ～ 20001031	256/2,043	宅地分譲
村上新山西遺跡	八千代市村上 字新山649-3	12221	188	35度 44分 19秒	140度 7分 29秒	20001225 ～ 20001228	205/1,400	残土埋め 立て
向山遺跡 b地点	八千代市大和田新田 字向山476-16	12221	173	35度 43分 30秒	140度 6分 03秒	20001215 ～ 20001225	上層332.8 下層9.6 /2,983.06	共同住宅
白筋遺跡	八千代市村上 字白筋2700-1ほか	12221	208	35度 43分 19秒	140度 7分 18秒	20010118 ～ 20010125	94/210 本調査1	土地区画 整理
新林遺跡 d地点	八千代市上高野 字新林1195-2,3,4	12221	233	35度 43分 04秒	140度 7分 56秒	20010215 ～ 20010228	530/5,300	土地区画 整理
下高野新山遺跡	八千代市下高野 字新山546	12221	92	35度 44分 34秒	140度 8分 24秒	20010319 ～ 20010326	146/1,530	病院増設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
北裏畑遺跡	散布地	近世 近代	なし	陶器 軒先瓦	確認調査
雷遺跡 b 地点	散布地	時期不明	道路状遺構 1 条	なし	確認本調査
浅間内遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 古墳時代	ピット10基 ピット 2 基 住居跡 1 軒	縄文土器 土師器 土師器	第 4 次本調査及び第 5 次 確認調査
上谷津台南遺跡 d 地点	ピット群	縄文時代	陥し穴状遺構 2 基	なし	確認本調査
高津新田野馬堀 遺跡 i 地点	牧跡	近世 近代	野馬堀 1 条	陶器 磁器 泥面子	確認本調査
麦丸遺跡 d 地点	ピット跡	縄文時代 時期不明	炉穴 1 基 溝状遺構 1 条	縄文土器	確認本調査
村上宮内遺跡 b 地点	集落跡	古墳時代 近代	竪穴住居跡11軒 土坑 1 基 溝状遺構 1 条	土師器 磁器	確認調査
村上新山西遺跡	溝跡	近現代	溝状遺構 1 条	なし	確認調査
向山遺跡 b 地点	ピット跡	縄文時代	ピット 1 基	縄文土器	確認本調査
白筋遺跡	古墳	古墳時代	古墳周溝 1 条 ピット 1 基	土師器	市指定文化財根上神社古 墳の周溝
新林遺跡 d 地点	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡13軒 土坑 ピット34基	縄文土器 土製耳飾り 泥面子	第 1 次確認調査
下高野新山遺跡	ピット群	縄文時代	ピット22基	縄文土器	確認調査

調 査 組 織 (平成12年度現在)

調査主体者 磯貝 謹吾 (八千代市教育委員会教育長)

事務担当者 藤城 恒昭 (八千代市教育委員会生涯学習部長)

山本 正 (八千代市教育委員会生涯学習部次長)

鈴木 賢治 (八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長)

相馬 文子 (八千代市教育委員会同部生涯学習課文化財保護班主査)

山崎 和義 (八千代市教育委員会同部生涯学習課文化財保護班副主査)

秋山 利光 (八千代市教育委員会同部生涯学習課文化財保護班主任文化財主事)

宮澤 久史 (八千代市教育委員会同部生涯学習課文化財保護班主任文化財主事)

調査担当者 森 竜哉 (八千代市教育委員会同部生涯学習課文化財保護班主任文化財主事)

常松 成人 (八千代市教育委員会同部生涯学習課文化財保護班主任文化財主事)

調査補助員 笠川千代子 古滝 洋子 佐々木正子 鈴木 一代 鈴木 勉 高橋 道子 立石 勝代

立石ふく子 寺澤 洋子 鳥羽 良子 永島 辰夫 野中 則子 花島喜久江 原田 雪子

日向 洋子 福島 正晃 松崎 栄子 山本みつ江 吉田 悦子 渡辺 登

整理補助員 植田 正子 長田 京子 見神 光恵

事 務 員 三宅由美子

写真図版

図版1 (1)~(4)北裏畑遺跡・(5)~(8)雷遺跡b地点



(1)調査風景



(2)土層断面



(3)調査風景



(4)出土遺物



(5)調査前風景



(6)道路状遺構検出状況



(7)道路状遺構掘り下げ状況



(8)道路状遺構土層断面



(1)トレンチ掘り下げ状況



(2)トレンチ掘り下げ状況



(3)ピット群完掘状況



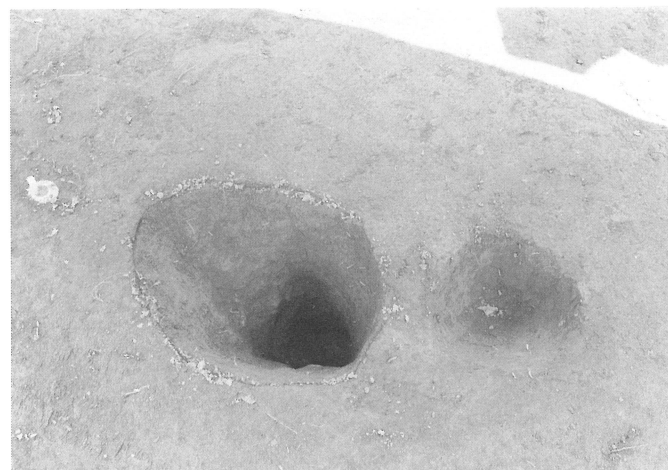
(4)571P完掘状況



(5)564P完掘状況



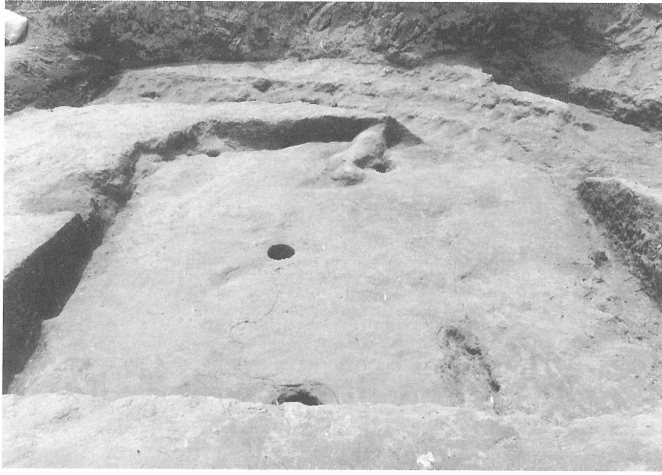
(6)567P完掘状況



(7)562P完掘状況



(8)568P完掘状況



(1)73D完掘状況



(2)73D完掘状況



(3)73D遺物出土状況



(4)出土遺物



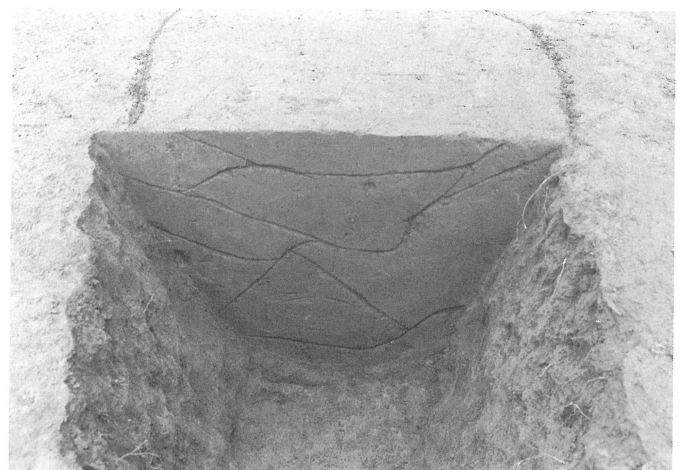
(5)調査風景



(6)土層断面



(7)調査風景



(8)02P土層断面



(1)02P完掘状況



(2)01P土層断面



(3)01P完掘状況



(4)調査風景



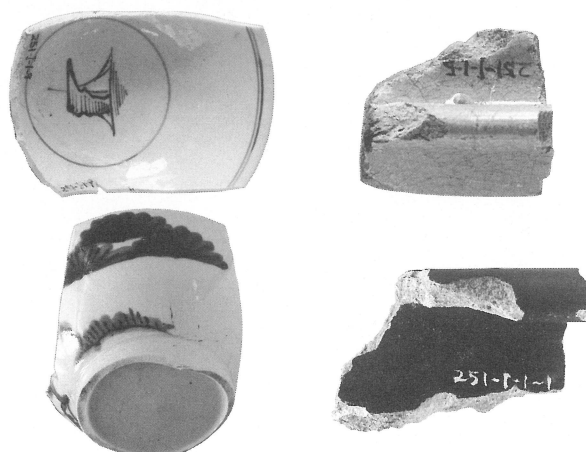
(5)Aトレンチ土層断面



(6)調査風景



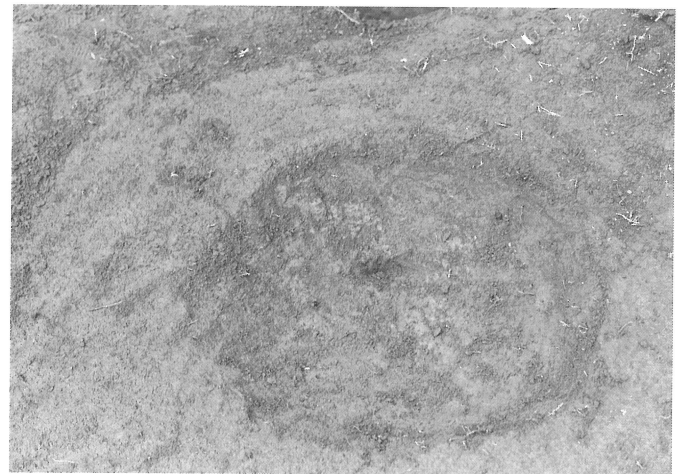
(7)堀完掘状況



(8)出土遺物



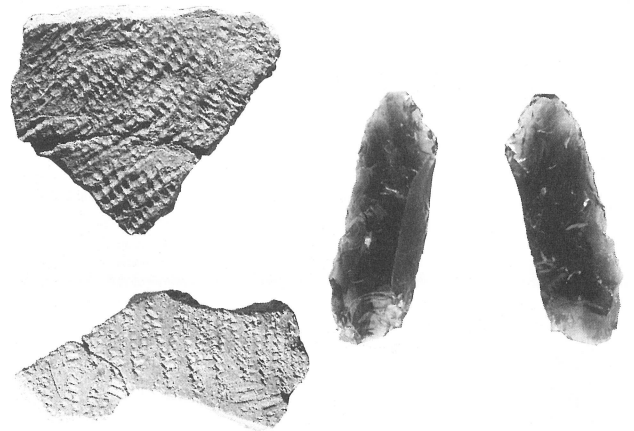
(1)調査前風景



(2)01P完掘状況



(3)01M完掘状況



(4)出土遺物



(5)調査前風景



(6)調査風景



(7)遺構検出状況



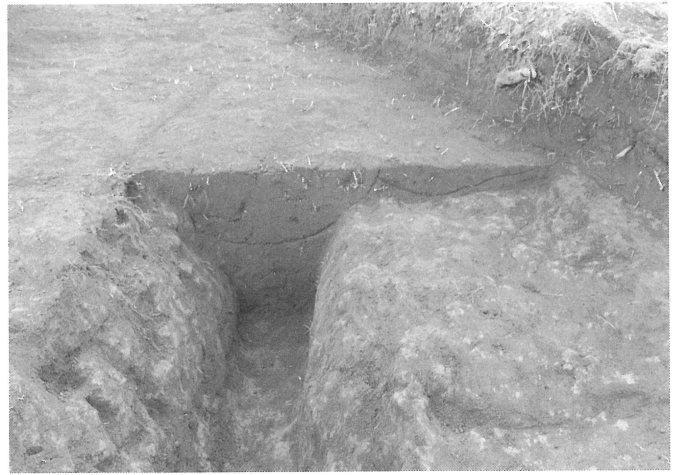
(8)トレンチ内遺物出土状況



(1)出土遺物



(2)調査風景



(3) 8 T 溝土層断面



(4)トレンチ完掘状況



(5) 3 T 土層断面



(1)調査前風景



(2)土層断面



(3)01P完掘状況



(4)調査区近影 (後方が古墳境丘)



(5)4T・5T完掘状況



(6)周溝検出状況



(7)3T古墳周溝近景



(8)2T土坑土層断面



(1) 2 T土層断面



(2) 1T土層断面



(3) 調査前風景



(4) 調査風景



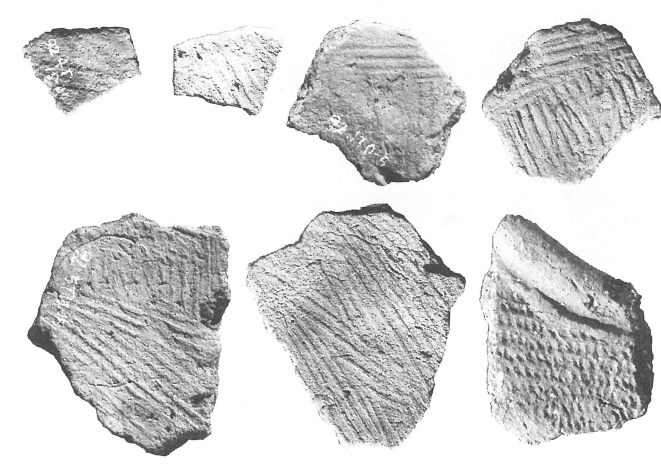
(5) 土層断面



(6) 遺構検出状況



(7) 遺構検出状況



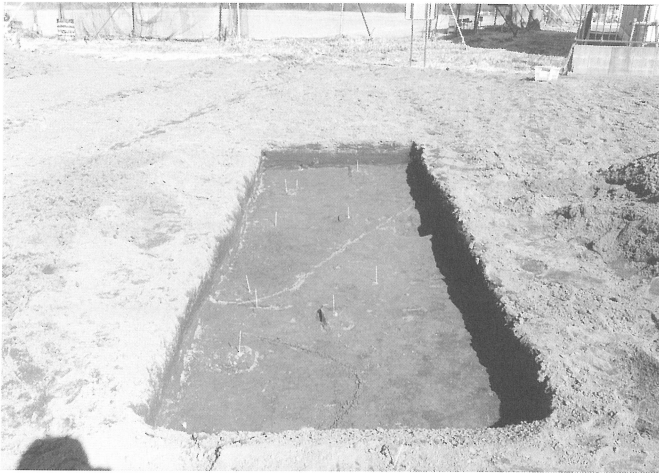
(8) 出土遺物



(1)調査風景



(2)土層断面



(3)遺構検出状況



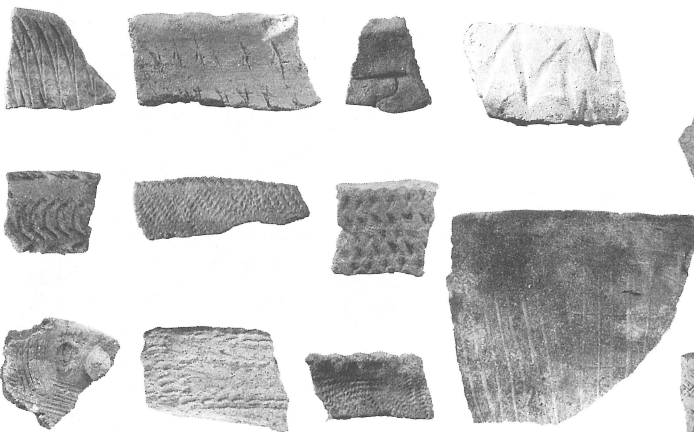
(4)遺構検出状況



(5)遺物出土状況



(6)遺物出土状況



(7)出土遺物

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成13年度

印刷日 2002年3月22日

発行日 2002年3月29日

発行 八千代市教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒276-0045 八千代市大和田138-2

TEL 047(483)1151

印刷 株式会社 宣美